
インフィニットストラトス 3・2・1、フォーゼ来たーーーー！！

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティストラトス 3・2・1、フォーゼ来たー！ー！
！！

【Nコード】

N6513Z

【作者名】

ケン

【あらすじ】

宇宙大好き少年、織斑一夏と同じく宇宙大好き少女如月太陽が出会うとき青春スイッチが押される。その手で宇宙をつかみとれ！！青春スイッチオン！！！！

プロローグ 初・変・身

一人の少年が縄で縛られ人質にされていた。

少年の名は織斑一夏。学校の帰り道でいきなり目の前に黒い車が止まり

黒服を着た男たちに無理やり車に押し込まれたわけである。

そして、隣にはもう一人少女が人質にされていた。

名は如月太陽。理由は定かではないが連れ込まれていた。

「ねえ、大丈夫？」

一夏は心配そうに少女に尋ねるが少女はけるつとした感じで答えた。

「うん。大丈夫だよ。誘拐なんてもうこれで何回目か」

「はは！一緒だね。僕も結構な回数、誘拐されてるよ」

二人は何故か意気投合し、危機的状况にもかかわらず

喋って笑っていた。自分の家族の事や学校の事を

笑って喋っていた。

「ねえ、ここから二人で抜け出しちゃおか」

突然、一夏がそう言いだすと少女は一夏に疑問をぶつけた。

「出来るの？そんな事」

「見せてよ」

一夏は腕をくねらせていくと数秒後には縄が解けてしまっていた。

所望、縄抜けである。あまりに誘拐され過ぎたため自然と身につけ

てしまったのである。

「おお！！凄い！！」

「君のもほどこいてあげるよ」

一夏は立ち上がり少女の縄もほどこき周りに男たちがいないのを

確認してからその場を立ち去った。

「さて、ここからどうしようか」

「ん〜ひとまず、私のカバ」

少女が言いかけたとたんに壁が突然、爆発を起こし大穴があいた。

「きゃあー!!」

「な、何!?」

「見つけたぞ!!くそ餓鬼ども!!」

「げ!逃げよう!!」

一夏は少女の手を取り走っていきが子供が大人を撒ける訳もなく一つの部屋に追い込まれてしまった。

「たつく!なんでこんなガキどもをあいつらはさらってくれなんて言ったのかね。ま、良いや。どうせ、お前らはここで死ぬから」

男性は服のポケットからスイッチの様なものを取り出した。

形状はアイスクリームのコーンに似た形をしておりてっぺんにはブッシュ式の赤いスイッチがあつた。しかし、すぐに形状が変化した。

『ラスト・ワン』

「な、なんなの!?あれ」

「ひやははは!!死ね、くそ餓鬼ども!!」

男性がスイッチを押すと星座の様なものが浮かび上がり、男性が眉に包まれて

怪人から出てきて、精神がゾディアーツとなった。

「あの星座はうみへび座のゾディアーツ!!」

「な、何なの!?そのゾ、ゾディアーツって」

「ゾディアーツ!!それよりも私のカバンはないの?」

少女が部屋を見渡すと机の上にスーツケースの様な大きなカバンが見えた。

「あ、あつた!!私のカバン!!」

少女はその鞆を取り開け中からベルトの様なものが出てきた。

その形状はスイッチが4つくぼみに入っており右端にはレバーがあ

った。

「死ね!!!」

ゾディアーツが大きな剣を召喚し二人を切りかかるが一夏が少女を護ろうと横に押し出した。

「え？君!!!」

その剣は一夏に向け、まっすぐ降ろされた。

「ああ、僕死んじゃうのかな」

一夏が目をつむり痛みに耐えるが一向に痛みは来なかった。不思議に思い目を開けるとそこには、壁にまで吹き飛ばされうづくまっていたゾディアーツがいた。

「くそ!!!なんなんだ!?!さっきのは!!!」

少女のカバンに入っていたベルトのスイッチが光り輝いていたのだ。

「もしかして…君!!!」

「な、何？」

少女が慌てて一夏に近寄るとドライバーを一夏に持たせた。するとスイッチは先ほどよりも激しく輝きだした。

「やっぱり。ねえ、君。まだ、生きたいよね？」

「……当たり前だよ!!!僕は生きたい!!!生きてまたお姉ちゃんに会いたい!!!」

「うん。だったら、このベルトを使って」

「これを？」

「うん。これを使えばあいつを倒せる」

少女は一夏にドライバーを手渡した。

「うん、分かった。後僕は君っていう名前じゃない。織斑一夏だよ」

「私は如月太陽」

一夏はベルトを受け取りお腹のあたりに持っていくと自動的に腰に巻きついた。

「これ、どう使うの？」

「赤いスイッチを4つ押して変身って言って

右のレバーを引いてみて。こう!!!」

太陽は変身の仕方をジェスチャーで一夏に教えた。

「う、うん」

一夏は4つの赤いスイッチを順番に押していくと音が鳴りだし4つ押すとカウントが始まった。

『3・2・1』

「え?え?」

「そのままレバーを引いて!!!」

「う、うん。えっと、変身!!!」

一夏がレバーを引くと辺りに突風が吹き荒れた。

「く!!!」

「きゃ!!!」

風が収まるとそこには…

「な、何これ」

「それがフォーゼ!!!」

「フォ、フォーゼだと!?!ここで潰す!!!」

怪人が驚いたようにフォーゼの名を言うと剣を片手に襲いかかってきた。

「うおおおおお!!!」

「え、えっと。もう、どうにでもなれ!!!」

一夏がオレンジ色の1と書かれたスイッチを押すと音声の流れ右腕にロケットが現れた。

『ロケット・オン』

「おおおおお!!!ほ、本物のロケットだ」

腕のロケットが本物の様にジェット噴射を始め

一夏は怪人を巻き込みながら壁を突き破り外へと出ていった。

「うひゃ〜あれがフォーゼの力か」

「おおおおお、目がまわる」

「ふざけやがって!!」

外にゾディアーツを追い出したのは良いが

ロケットの余りにも噴射が強く勝手に回っていた。

変身して背が伸長したとはいえ、まだ一夏は5歳である。

そこに怪人が勝手に突っ込みロケットパンチを勝手に受けて吹き飛んだ。

一夏はどうにかしてロケットスイッチをOFFにしたが酔ってしまった。

「あゝ気持ち悪い」

丁度、しゃがんだところに怪人の剣が過ぎていった。

「おりゃ!!」

「ぐう!!」

一夏は怪人に蹴りを入れて距離を取った。

「他にはこれだ!!」

『ランチャー・オン』

右足にミサイルが搭載されたランチャーが出てきた。

「ミサイルといえばこれでしょ!!」

『レーダー・オン』

ベルトの左のスイッチを入れると左腕にレーダーが出てきた。

「よし。ロックオン!!喰らえ!!」

ミサイルが勢いよく怪人に向かって発射され怪人に直撃し空中に上がった。

「うわあああああ!!!!」

「よっしゃ!!止めだ!!」

『ロケット、ドリル・オン』

「このレバーを押すと」

『ロケット、ドリル・リミットブレイク』

レバーをもう一度引くとベルトから電子音声の流れ

ロケットのジェット噴射で空に浮きあがり左足のドリルが勢いよく回転した。

「喰らえ!!! ロケットドリルキーーーーーック!!!!」

「ぐわあああああ!!!」

怪人はドリルに貫かれ大爆発を起こしスイッチを残して消え去った。

「おおおお〜目、目がまわる〜」

一夏はドリルが地面に刺さりそのまま回転をしていた。

「と、止まった〜」

「やったね〜一夏!!!」

隠れていた太陽が一夏の傍に嬉しそうにして近寄って来た。

「うん!!!で、このスイッチはどうしたら」

「これはね。こうするの」

太陽がもう一度スイッチを押すと消滅してしまった。

「ひと先ず、もうすぐ迎えが来るから

待っていてようよ!!!さっき、家の人を呼んだから」

「うん、ん?」

一夏は突然、何かに気付いた様に後ろを振り返った。

「どうかしたの?一夏」

「いや、さっき誰かに見られてたような気が」

「誰もいないよ。気の所為でしょ」

「そうだね!!!」

こうして二人は無事に帰る事が出来た。

プロローグ 初・変・身(後書き)

こんばんわ、ケンです!!

4作品目となる作品です!!

頑張っていきますので応援よりしくっす!!

プロローグ2 緊・急・事・態

ある建物の一室に丸いドーム状の椅子に座り先程のスイッチを持った男性がいた。

目の前にはクロークを着たサソリのような姿のゾディアーツが跪いており

その後ろには同じくクロークを着たゾディアーツが並んでいた。

「報告を頼むよ、スコープオン」

「はい。下部組織からあれを所持している人間を捕らえたと報告が入り向かったところどうやら、あれは一人の少年の

手に渡りさらにはフォーゼに変身しました」

「ほく。という事はその少年も関係者かい？」

「いえ。どうやら一般人の様です」

「何？」

「どうやら別の組織に誘拐された少年のいた場所が偶然下部組織と同じだったみたいです」

「そうか…これは面白い事になってきたな」

「如何しましょう」

「君には監視を頼みたい。出来るね？」

「かしこまりました」

一夏達はあれから無事に太陽の家に保護され今は太陽の家で休んでいた。

「ひえく大きいんだね。太陽ちゃんの家って」

「そうかなく？こんな物じゃないの？」

太陽の家は普通の一軒家に比べるとはるかに大きく

4階建てでさらには一部屋に一台テレビが置いてあった。

「太陽ちゃんの両親で何かしてるの？」

「……………」

「太陽ちゃん？」

「一夏が不思議に思い振り向いてみると太陽は涙を流していた。」

「た、太陽ちゃん！？どうかしたの！？」

「私のお父さんはね、私が小さい時に死んじゃったの」

「ご、ごめん」

「うん。良いよ、一夏は知らなかったんだし。それで、

お母さんはね会社の社長さんなんだって」

「お母さんのお仕事知らないの？」

「うん。お母さん、忙しくてたまにしか帰ってこないし帰ってきたとしても」

また、すぐにお仕事に行っちゃうし」

「じゃあ、この家には太陽ちゃん一人だけなの？」

「うん。家賃とかはおじいちゃん達が払ってくれてて

家事とかは私が一人でしてるの」

「寂しくないの？」

「寂しいよ」

太陽は涙を手でぬぐいながら話しているが涙は一向に止まらずに服を濡らしていった。

「だったら僕が傍にいてあげる！！」

「え？」

「一夏のいきなりの叫びに驚き顔を上げると近くに

「一夏の顔があり太陽は顔を少し赤くしてしまった。」

「君が寂しいなら僕がその寂しさを和らげてあげる！！」

それにまた、太陽ちゃんゾディーアツに襲われてもいけないから僕がフォーゼになって護つてあげる！！」

「本当？」

「うん！！ほんとだよ！！」

「ありがと!!!一夏!!!!」
太陽の笑顔に一夏は少し顔を赤くした。
それから、一夏は一旦家に帰り心配している千冬に無事な事を報告しその翌日から一夏と太陽は一緒に遊ぶ間柄となった。

それから10年後、事態は一気に急変する事となる。
一夏は幼馴染となった太陽の家でテレビを見ていた。
その手にはロケットスイッチが握られておりon、offを
ずっと繰り返していた。どうやら癖の様である。

画面には世界で初めて男性でISを動かした男、織斑一夏と表示されてお

どのチャンネルに回しても同じ顔写真が映っていた。

「不幸だ」

「いつからあなたはツンツン頭の神様の奇跡すら打ち消す
右腕を持つ少年になったのよ」

後ろから声が聞こえたが一夏は後ろを向かずにテレビを見ながら答えた。

ちなみに今の太陽の容姿は科学者が着るような白衣を着ていた。

「は〜なんで俺あの時、部屋間違えたんだろ」

「自業自得ね。ほら、新スイッチのテストをするから
ラビットハッチに行きましょう」

「へ〜い」

一夏はフォーゼドライバーを持ち太陽と一緒にタンスに入ると
その中は月面基地、ラビットハッチに繋がっておりそこでは
太陽がスイッチの調整を行い、テストをするという事だった。

「じゃ、変身しちゃって」

「おっけ」

一夏はドライバーを着け赤いスイッチを押していった。

『3・2・1』

「変身！！」

レバーを引くと一夏はフォーゼとなっていた。

「よし、今日テストするのはNO5のマジックハンドスイッチよ」

「了解」

一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチに交換しスイッチを入れた。

『マジックハンド』

「よつと」

『マジックハンド・オン』

右腕に出てきたのは伸縮自在のアームが出てきた。

「へ〜これ伸びるんだな」

『まあね。それで、人も持ったり投げ飛ばしたりできるわよ』

「そっかくにしても明日から一緒にIS学園か〜」

『そっね。一夏は嬉しい?』

「勿論。嬉しいに決まってるだろ」

『そ、そっか。じゃあ、今日はここ迄にして明日に備えて寝よう!』

『!』

「了解」

明日はIS学園の入学式である。

どんな生活が待っているのかはまだ二人には分からない事である。

プロローグ2 緊・急・事・態（後書き）

こんばんわ、ケンです!!

連続更新でございます!!

感想もお待ちしております!!

それでは!!

第1話 大・遅・刻

ある部屋にけたましく目覚ましの音が鳴り響いていた。

「あく眠い。今何時だよ……なんでだろ。6という数字が8に見えるのは気のせいだろうか」

一夏はテレビのリモコンを操作し電源をつけると左上にはデジタル表示で8時15分とあった。ちなみにIS学園の登校時間は8時20分らしい。

「寝坊だ……！！！！！！！！！！」

織斑一夏の朝はこうして始まった。

一夏はあれから3分で準備をし愛車のマシンマッシンググラーというネーミングセンスゼロのバイクに乗りIS学園に向かっていった。

テーブルには置手紙がありそこには、きれいな字で行ってるとだけ書かれていた。

「なんで太陽の奴見捨てたんだよ」

一夏はぶつぶつとぼやきながら運転していた。

「ああ、あれかIS学園は……ん？あれは」

遠くの方に青いISと赤色の何かが戦っているのが見えた。

「ちっ！！朝っぱらからゾディアーツですか」

一夏は校門を無理やりバイクで飛び越えるとゾディアーツに向かい最高速度で体当たりをし吹き飛ばした。

IS学園生徒会長の更識楯無は入学式も終わり教室に戻ろうとした時突然、ゾディアーツに襲われた。

「な、何あれ！？」

『更識楯無…許さない!!!!』

楯無は慌ててミステリアスレイディを展開し、武装を展開するが一方的にゾディアーツの怪光線を何発も喰らいエネルギーが減少していく一方だった。

「はあ、はあ、ISが圧倒されるなんて、あいつなんなのよ」

『ははは!!!生徒会長もこの程度か、死ね!!!!』

赤色のゾディアーツに体が青く光りだし怪光線が発射される瞬間に横からバイクが突っ込みゾディアーツを突き飛ばした。

『だ、誰だ!!!』

「who am I?」

『邪魔する者は全て潰す!!!!』

ゾディアーツはヘルメットをかぶった少年に殴りかかるがそれをかわし、

後ろに回り込み蹴りを入れた。

『きゃ!!!』

「き、君は一体誰なの?」

「いいのがあんじゃん。使わせてもらっぞ」

少年は楯無が先程まで使用していたソードを拾い武器として使った。

「さあ、行っけ、行っけ!!!」

少年はソードで何度もゾディアーツを切ってひくたびに火花が散っていった。

相手も攻撃を加えようとするがそれをさせる前にソードで切られていき

攻撃が出来なかった。

『あ、あんたISの武装を生身で使っとか異常でしょ!!!!』

「鍛えてるから」

『くそ!!!』

一夏が近寄ろうとした瞬間にゾディアーツは体から光線を出しその爆煙でどこかに消え去ってしまった。

「逃げたか…ありがとうさん。これ返すわ」

「え、ええ。貴方一体何者なの？」

「俺は」

少年が言いかけた時頭に物凄い衝撃が伝わり

頭を抱えて蹲ってしまった。ヘルメットをしているのにも拘らず。

「馬鹿ものが。15であるにもかかわらずバイクを運転するな!!」

「げ！なんでここに」

振り向くとそこには織斑千冬がいた。

「ヘルメットを取らんか、一夏」

一夏はヘルメットを外すともう一度出席簿で頭を叩かれた。

「痛い!!何すんですか!!」

「遅刻の罰だ、馬鹿もの。さっさと教室に来い」

「へ〜い。じゃあな、名も知らない女の子」

一夏は千冬に連れられ教室に向かった。驚きの連続で

頭の処理能力が追いつかない楯無を放っておいて。

千冬に連れられた一夏は1組の前で止められた。

「ここが貴様の教室だ」

「へ〜い」

また、出席簿アタックを頭に当てられた。

「返事ははいだ」

「ひゃい」

一夏は頭をさすりながら千冬と共に教室に入った。

すると次の瞬間、とても甲高い声が教室中に響き渡った。

どうやら、自己紹介をしていたみたいだ。

「「「「「きゃーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」

「千冬様よ！！！！」

「私、ずっとファンでした！！！」

「お姉さまの為なら死ねます！！！」

「は〜毎年、毎年、私のクラスに馬鹿どもを集めているのか？
静かにしろ！！小娘共！！！！」

千冬の一括を喰らうと先程まであれだけ騒いでいた生徒全員が口を
閉じた。

「私の仕事は貴様らを優秀な操縦者にする事だ！！！」

私の言う事は全て聞け！！理解できなくても頭につき込め！！！
良いな！！！！」

「……はい！！！！」

「よろしい。授業に入る前に織斑、挨拶をしる」

「は〜い。俺の名は織斑一夏。趣味は天体観測。」

IS学園の生徒全員と友達になる男だ！！よろしく！！！！」

「……」

「……まあ良い。さつさと座れ、授業を始める」

「あんたが自己紹介しろって言ったんじゃ〜」

「誰が立って挨拶をしるといった」

「心を読まないください」

こうして授業がようやく始まった。

授業の終了の合図の鐘が鳴ると同時に一夏は机にへばりついた。

「意味不。こんなもん理解できんのかよ」

「あなた以外全員理解してるよ」

「太陽か……起こしてくれよ！！！！」

「私は何度も起こしたけど起きない貴方が悪い」

「そうだけどさ〜」

「それよりも朝のゾディアーツの件だけど」

「ああ。目星はついたのか？」

二人は周りに聞かれない様にひそひそと喋り始めた。

「何人かはね。また、後で言うわ」

「了解」

太陽が席についたと同時に始まりのチャイムが鳴り響いた。ちなみに太陽の席は一夏の列の最後尾である。

「…なのでISを扱う時の罰則は国によって違うので注意しておいてくださいね」。時間もいい塩梅なので終わりにしましょう」

2時間が終わった時には一夏は見事に撃沈されていた。まったく内容が理解できずにスイッチをいじってたら千冬に出席簿で叩かれ

山田先生（1組の副担任である。ちなみに担任は千冬）に全部分らないと言えは

また、叩かれた。そのせいで頭皮がヒリヒリしていた。

「ちょっと、よろしくて？」

「あ？」

後ろを振り向くと金髪タテマキロールの少女が立っていた。

第1話 大・遅・刻（後書き）

こんにちわ、ケンです。

いかがでしたか？

今は学校で更新しています。

感想もお待ちしております。

それでは、さよなら

第2話 事・件・調・査

「ちよつと、よろしくて？」

「あ？」

「まあ！なんですよ。その返事は。私に話しかけられたのですからそれ相応の返事があるでしょう」

「お前誰だよ」

「知らない！？このイギリス代表候補生、セシリアオルコットを！
！」

セシリアは腰に手を置きながら威張った。いかにも女尊男卑の影響をもろに受け、
威張っている女性の良い例だった。

「……太陽〱腹減った」

一夏はセシリアを無視して太陽のもとに食べ物を買うべく近づいていった。

「ちよ、ちよつと無視ですよ！？」

「悪いけど貴方みたいな奴、一夏は大っ嫌いだから無視する習性があるの」

「な、何ですよ！？貴方は！！」

「さっき自己紹介したでしょうが」

「太陽〱何か持ってないか？」

「何もないわよ」

「残念」

「あ、貴方達ねえ！！！」

セシリアが言いかけた瞬間にチャイムが鳴り響いた。

セシリアはかなりご立腹の様で地団駄を踏みながら叫んだ。

「また、来ますわ！！！」

そう言いズカズカと座席に戻り一夏も座席に戻っていった。

「では、授業を始める。あ、その前にクラス代表を決めないとな」
千冬が思い出したかのように言い始めた。

「クラス代表はまあ、言えば委員長のようなものだ。生徒会の会議などにも

出席してもらおう。一度決まれば1年は変更できないから注意しろ。

「誰かいないか？自薦、他薦どちらでも構わんぞ」

少し沈黙が流れた後に一人の女子生徒が手を挙げた。

「はい！織斑君を推薦します！！」

「あたしも！！」

一気に教室のほぼ全員が一夏を推薦する状況となった。

「そんなの納得がいきませんわ！！」

セシリアが机を叩いて勢いよく立ちあがった。

「本来クラス代表はクラスで最も強い人になるものなのに

そんなISに関しては全くのド素人でさらには知性も、

ないような極東のサルに任せてはいい恥さらしですわ！！

いいですか！？私はここにISを学びに来ているのです！！

サーカスを見に来ているわけでは」

セシリアが言いかけた瞬間に、顔の横を何かがものすごい速さで

通り壁にぶつかった音が響いた。

生徒全員は青ざめながら、中には体を震わし恐怖を示す生徒もいる

中で

何かを壁に投げた張本人の方向を見た。

「さつきからゴチャゴチャとうるさいな〜イギリスも

飯マズ王者の座に何年居座ってんだよ」

「わ、私の祖国を侮辱しますの！？」

「あんたが先にしたんでしょうが」

後ろから声が聞こえたかと思うと太陽が立っていた。

太陽も相当いらついでるらしく声にいらつきが混じっているのが
こちらからでも分かった。

「私は侮辱などしていませんわ!!」

「自分の事は棚上げか。代表候補性が聞いて呆れるわね」

「こんなやつがクラスメイトかと思うとこの先が思いやられるな」

「け、決闘ですわ!!」

「私はパスね。体弱いからISで戦えないし」

太陽は生まれつき体が弱く運動などは一切できない虚弱体質だった。

しかし、なぜかISの適正はBなので合格したが

来年は整備課に進もうとしているらしい。

「俺もいいや。どうせ俺が勝つし」

「あ、貴方ねえ!!」

「そこまでにしろ、馬鹿ども。立候補者は織斑とオルコットに

兩名だ。二人は来週に模擬戦をして勝ったほうがクラス代表になれ。

意義は認めん!!それと織斑、机は投げるもんじゃないぞ」

一夏の席には机があるはずなのだが机はなく後ろの壁に投げられていた。

その光景を見た女子生徒は顔を引きつらせ心の中で、織斑君は怒らせてはいけない

という1組特有の暗黙のルールが完成した。

こうして来週に模擬戦をすることが決まった。

放課後、一夏は帰り支度をしていた。

IS学園は全寮制なのだが寮の部屋がまだ、決まっていないうので

1週間は自宅登校となっている。

「一夏、帰るよ」

「太陽は確か寮じゃなかったのか?」

「そうだよ、一夏もだよ」

「いや、俺は」

「さっき山田先生から聞いたんだけど政府からの通達で

寮住まいにしろつてさ。それで、一夏は私と同室だよ」

「分かった。ついでに部屋であるの件について話すか」

「おっけ」

一夏と太陽は自室に入るとなぜか、部屋にタンスがあった。

「なんでここにこれがあるんだ？」

「ラビットハッチに繋がってるのはこれだけだからね。運んでもらった」

「ん〜了解。じゃ、入るか」

二人は玄関のドアのカギが閉まってるのを確認し

タンスに入るとその中はラビットハッチに繋がっていた。

中は案外広く、着きに出られる出口やアストロスイッチを調整する調整室に一夏がテストをする部屋もあり

テーブルや椅子も完備されていた。

「まず、あのゾディアーツはオリオンゾディアーツよ。

スイッチャーの目星は今のところ二人」

太陽は持っていたカバンを開けるとそれは普通のカバンではなくアストロスイッチを収納できさらにはデータ分析もできる特殊なものだった。

「襲われた人を考慮に入れると怪しいのはこの会長の妹の

更識簪、それともう一人は3年の鶴見桜。理由は妹さんのほうは

姉との間に溝があるの。3年のほうは更識楯無の事を何故か憎んでいるわ」

「その理由は？」

「まだ、分からないわ。情報が少なすぎるわね」

「ん〜なら、俺も探してみるか」

一夏は椅子から立ち上がり出口へと向かっていった。

「どこに行くの？」

「ちよつと事情聴取。太陽は引き続き頼むわ」
「了解」

一夏は今、生徒会室の前にいた。

理由は会長の楯無に話を聞くためであった。

「失礼しまゝす」

「はゝいつて君は今朝の」

生徒会室には楯無一人だけが椅子に座っていた。

「あなたに聞きたいことがあるんだけどいいか」

「ええ、いいわよ。座って」

「ひとまずあなたに聞きたいのは鶴見桜の事についてだ」

「鶴見さんがどうかしたの？」

「あなたさゝ鶴見ってやつに恨みとか、かわれてないか？」

「……」

楯無は何か思い当たる節があるのか苦い顔をしていた。

「何かあるのか？」

「ええ、まあね。あれは去年の話ね。彼女は前の会長よ」

「ふんふん」

「ここの会長は最強の人がなるものなんだけど、私はその人と勝負して勝っちゃったのよね」

「別にそれだけなら」

「でも、その勝ち方がいけなかった。みんなの前で私はその人に圧勝しちゃったのよ。それで、その人はみんなに」

「みんなに笑い者にされたというわけね。2年のくせに1年に負けた奴っていうことで」

「うん。それで何回も謝りに行ったんだけど取り合ってくれなくて」

「そついうことね…あなたは仲直りしたいのか？」

「勿論よ。このまま、うやむやにしちゃいけないし」

「だったら俺に任せろ」

「え？」

「俺にいい考えがある」

「夏は自分の考えに自信があるのかその顔は
余裕に満ちていた。」

第2話 事・件・調・査（後書き）

こんばんわ、ケンです。

如何でしたか？できれば感想を頂ければ幸いです。

作者自身は感想でパワーアップしますから。

ま、感想を送るのは読者の皆様なのでこんな事を言ったら

駄目ですね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。

それでは

第3話 ラストワン

現時刻は7:30.

第6アリーナに一人の女子生徒が佇んでいた。

名前は鶴

リボンの色を見るとどうやら3年生の様だ。

彼女の右手には一枚の手紙が握られており内容は明日の

7:30に第6アリーナに来てくれというものだった。

「誰がこの手紙を出したのよ」

「それは私が出しました」

急に声が聞こえ後ろを見るとそこには更識楯無が立っていた。

「何の用よ!! また、謝りに来たって言うの!?!」

「はい。あの時は」

「黙れ!! あんたのその顔が気に入らないのよ!! あの時だってそうだった!!」

あんたはそうやって上から目線で他人を見下しているのよ!!」

「そ、そんな事は」

「あんたが気づいていないだけよ!! 私以外にも貴方を気に入らない奴なんか

この学校にいっぱいいるのよ!!」

「あゝそれは賛成だな」

楯無の後ろにはいつのまにか一夏が立っておりその隣には太陽もカバンを持ち立っていた。

「誰よ、あんた!!」

「俺もこの人に会った時にまず初めに感じたのは他人を見下してるって感じがしたかな」

「……」

楯無は顔を俯かせたままあげようとしなかった。

「でもさ、こいつは良い所もあるんだぜ」

「良いところ!？」

「そう。こいつはあんたに勝った日からずっと周りの誤解を解いて
いつているんだよ。」

あの人は弱くなんかないって。私だって負けかけたって」

「そ、そんな事!！」

「別に嘘と思うならずっと思っとけ。でもな、スイッチを使って憂
さ晴らしを

しようとするな。それは人間を喰らうぞ」

「う、うるさい、うるさい!！」

『ラスト・ワン』

桜のゾディアーツスイッチが変化しまるで眼球の様な
おぞましい形に変化した。

「だめ!！それを使ったら自力で元に戻れなくなっちゃうよ!？」

「おおおおおお!！」

桜がスイッチを押すとオリオン座の星座が浮かび上がり黒い何かに
包まれた後、桜の肉体だけが眉に包まれ外に排出された。

オリオンゾディアーツの姿は先程とは変わっていないが両手に
楯と棍棒のような物が新しく装備されていた。

「太陽。会長さんを安全な所に」

「うん。さ、会長こっちに」

「え、でも彼は」

「大丈夫。あの人は」

一夏はドライバーをつけ赤色のスイッチを順番に押していき4つ
押すとカウントが始まった。

『3・2・1』

「変身!！」

レバーを引き腕を空に向かってあげると頭上に輪っかが現れ
煙が吹き出し、煙が晴れるとそこにはフォーゼがいた。

「仮面ライダーだから」

「宇宙来たーーーーー!!!!!!」

『な、なんなの貴方は!?!』

「仮面ライダーフォーゼ!!!タイムンはらせてもらっせ!!!!」

「か、仮面ライダー!?!」

一夏はオリオンゾディアーツに向かっていった。

「行くぜ、行くぜ!!!」

一夏は連続でパンチを撃つが先程とはけた外れに強くなっておりあまり効果が無かった。

『そんな物効かないわよ!!!!!!』

「うわあ!!!」

一夏はオリオンゾディアーツの棍棒で殴られ吹き飛ばされてしまった。

「くそ〜だったら新スイッチだ!!!!!!」

一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチをはめた。

『マジックハンド』

「よっと」

『マジックハンド・オン』

「そんな物で何をするのよ!!!」

「こつやるんだよ!!!」

一夏は右腕を振り回すとマジックハンドが伸びオリオンゾディアーツに

直撃し怯ませるとそこから何度も叩きつけた。

「くっ!!!邪魔なのよ!!!」

オリオンゾディアーツはこん棒でマジックハンドをたたき折ろうとしたが

一夏が腕を引きマジックハンドを戻すと空振り隙が出来た。

「もらったぜ!!!」

「え、きゃ!!!」

一夏はマジックハンドでオリオンゾディアーツを掴むと思いきり

横に振り回し始めた。

「おらおらおら!!!」

「きゃあああああ!!!」

「ふっ飛びーーーー!!!」

オリオンゾディアーツを思いっきり投げ飛ばし壁にぶつけるとレーザースイッチからベルが鳴り響いた。

『レーザー・オン』

『スイッチの場所が分かったわ。左胸にあるわ。奪ってOFFにして頂戴。』

でも、ここでの止めは危険だわ』

『どうして?』

『前に解析した時よりも体内にエネルギーが溜められているの。それをここで爆発させたらアリーナは軽く吹き飛ばわよ』

「じゃあ、どうすれば」

『宇宙でやりなさい』

「空?」

すると後ろからパワーダイザーとバイクが自動でこっちにまで来た。

『マシンをダイザーにセットして』

「分かった」

一夏はバイクに乗りダイザーに向かうとビークルモードだったダイザーがタワーモードへと変わった。

『マシンセット。タワーモード』

「おお〜発射台か〜」

『よし』

太陽が遠隔操作でダイザーの小型ミサイルを放つと

オリオンゾディアーツはミサイルにより空高くあげられた。

『な、なんなのよこれ!!!』

『3・2・1、ブラストオフ』

「行っけーーーー!!!」

「きゃあああああ！！！！！」
ダイザーからロケットを飛ばす要領でバイクが宇宙に向けて
オリオンゾディアーツごと空に行った。

「おら！！」

「きゃ！！」

一夏はバイクをその場に乗り捨て、浮かび上がるとロケットとドリ
ルをオンにした。

『ロケット、ドリル・オン』

「いくぜ！！」

『ロケット、ドリル、リーダー・リミットブレイク』

レバーを引くと現段階でオンになっているスイッチの名称が発音され
コズミックエナジーがフルチャージされた。

「喰らえ！！ロケットドリル宇宙キック！！！！」

『きゃあああああ！！！！！！』

ドリルで貫かれスイッチを残してオリオンゾディアーツは爆発した。
宙に浮いたスイッチを一夏が回収した途端に地球の重力により
引っ張られ落下を始めた。

「おおおおおおお！！！！何かないのか！？何か！これか！！！！」

一夏はリーダースイッチを交換しパラシュートスイッチを付けた。

『パラシュート。パラシュート・オン』

左腕にパラシュートが開かれ速度は落ちゆっくりと落下していった。

「ふい〜」

アリーナに帰ってきた一夏はゾディアーツスイッチをOFFにすると
スイッチが消滅し桜が目を見ました。

「ん、ん〜」

「大丈夫ですか！？鶴見さん！！」

「更識さん…ごめんね」

「え？」

「私貴方のこと勘違いしていたみたい」

「私の方こそごめんなさい。見下すような発言をして」

「いいのよ。これからこの学園を頼むわよ」

「はい！！」

その光景を一夏と太陽はほんわかと眺めていた。

「終わったな」

「うん。帰りましょうか」

一夏と太陽は帰ろうとした時、楯無に呼びとめられた。

「あ、あのありがと！！なんてお礼したらいいか」

「お礼はいらなからさこの事は秘密にしておいてくれ」

「ええ、分かったわ」

「クラス代表戦頑張っつてね。一夏君」

「あゝ気が向いたらな」

こうして楯無と桜の溝は無事修復された。

第3話 ラストワン（後書き）

こんにちわ、ケンです!!!

如何でしたか？人を怒る時とかはちゃんと冷静に考えないと

いけませんね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。
それでは

第4話 決・闘・開・始

一夏と太陽は朝早くからラビットハッチでスイッチのテストを行っていた。

『今日のスイッチはNO.9、ホッピングスイッチよ。実戦で使えるか試して頂戴』

「了解」

『ホッピング』

「よつと」

『ホッピング・オン』

スイッチを入れると左足にホッピングが現れたのは良いが突然、跳躍をはじめ狭い部屋の中を壁にぶつかりながらもあっちこっちに飛んでいった。

「な、なんだこれ〜」

一夏は慌ててホッピングスイッチを切るとようやく跳躍が止まった。すると部屋に太陽が入ってきてドライバーからホッピングスイッチを取った。

「このホッピングスイッチは使えないわね。調整しても無駄ね」
その言葉を聞いて一夏は太陽からスイッチを奪い取った。

「あ、ちよつと!!!」

「この世の中に無駄なものなんてねえ!!俺が証明してやる!!!」

「は〜。なら、頑張ってね。そろそろ時間だし行きましょるか」

「おう」

時計は7:30を示していた。

「織斑、お前の専用機が届くのに少し時間がかかる」

「は?」

4時間目の終わり際に千冬にそう言われた一夏は何を言っているのかさっぱり分からないといった顔をしていた。

「1年生のこの時期に専用機!？」

「良いな、良いな、私も専用機欲しいな」

やはり女子の皆は専用機が欲しいみたいで一夏の事を羨ましがっていた。

本来専用機は企業の代表か国家代表候補生でないと貰えないと言われており

終始、専用機持ちは特別扱いされている。

すると後ろの方からセシリアの声が聞こえてきた。

「それを聞いて安心しましたわ。訓練機で私に挑んでは

あつという間に終わってしまいますからね。ま、唯一入試試験で教官を倒した私の実力からすれば当たり前ですわね」

「入試試験で教官を倒すやつか？」

「それしかありませんわよ」

「なら、俺も倒したぞ」

「わ、私だけだと聞きましたか」

「それは女子の中ではじゃねえの」

「あ、貴方ねえ!!」

セシリアが突つかかろうとした瞬間にチャイムが鳴り響いた。
「今日はここまでだ」

太陽と一夏は食堂で昼食を取っていた。

食堂のメニューは和・洋・中全てが取りそろえられていた。

「ちよつと良いか？」

「ん？ああ、筍か」

隣にトレイを持った篠之ノ筍が一夏たちの隣に立っていた。

「一緒に食べても良いか？」

「どうぞ、ご勝手に」

箒は一夏の向かい側の席に座ると今日の日替わり定食であるサバ味噌定食を食べ始めた。

「一夏、この女誰？」

「篠之ノ箒、前に話したろ。セカンド幼馴染だよ」

「ああ」

「そんで俺の隣にいるのが如月太陽」

「篠之ノ箒だ。よろしく頼む」

箒が握手を求めようと手を出すのが太陽はそれを無視して昼食を取っていた。

「悪いけど私は一夏としか友達にならないから」

「は？」

「ああ、悪いな。こいつは昔ちよつとあつてさ俺にしか懐かないんだよ」

「そ、そうか」

三人が話していると上級生の生徒がこちらに近づいて来た。

「ねえ、君が織斑君だよな」

「ええ、そうですか」

「代表候補生と模擬戦するんだよね？だったら私が教えてあげようか？」

「どうやらESに関して教えてあげようとしてるようで」

周りの女子生徒は、「先、越された！！」とか言っただけで悔しそうにしていた。

「んゝ結構です」

「え？何で？織斑君は素人よね？代表候補生をなめたらいけないよ」

「お言葉ですが俺の方が強いんで。それじゃ。行こうぜ、太陽」

「んゝおっけ」

二人はトレイを返却しそのまま食堂を去っていった。

それから日にちは過ぎていき決闘当日となった。
Aピットには千冬と麻耶、それに太陽と篤がいた。

しかし、肝心の一夏の姿が見当たらなかった。

「如月、あいつは何をしているんだ」

「一夏は今頃、寝坊だー！ー！ー！とか叫んで慌てて
こっちに向かっていますよ」

するとピットのドアが開き入ってきたのは慌ててきたようなので
寝癖もそのまま一夏がISスーツを着て入ってきた。

そこにすかさず千冬の出席簿アタックがさく裂した。

「痛い！！！何すんですか！？」

「遅刻の罰だ。馬鹿もの」

「ですが、肝心の俺の専用機持遅刻してますけど」
すると奥の方から麻耶が一夏の名を連呼しながら
こっちに向かつて走ってきた。

「織斑君、織斑君、織斑君！！！」

「落ち着け、山田君」

「は、はい！！ふゝ。織斑君の専用機が届きましたよ！！！」

「そうですか。で、どこに？」

「これが織斑君の専用機、白式です！！！」

ピットの倉庫が開くとそこには無駄な色が無い

白一色のISが鎮座していた。

「へ〜これが白式か〜」

「織斑、時間がない。初期化、最適化は実戦で行え」

「了解」

一夏が白式を纏うとまるで待ち望んでいたかのように
白式が悲鳴を上げた。しかし、この悲鳴は一夏以外には

聞こえていなかった。

「そっか、そんなに嬉しいか。俺も嬉しいよ」

「一夏、調子はどうだ」

「最高の気分だよ。姉さん」

「そっか」

ISのハイパーセンサーでないと分からないくらいに千冬が小さく微笑んだ。

「太陽、箒、行ってくるわ」

「ああ、勝ってこい!!!」

「ま、楽に行つてきなさいな」

一夏はピットからフィールドへと出た。

フィールドには既にブルー・ティアーズを纏ったセシリアがいた。

「あら、よく逃げなかったですわね。貴方にハンデをあげますわ」

「あ?」

「私が全力で戦えば貴方がぼろ負けするのは自明の理。

ですから、ハンデを差し上げますわ」

「は。入らねえよそんなもん。全力で来い」

「良いですわ。後悔させてあげますわ!!!」

会場に始まりを告げるブザーが鳴り響いた。

「いきますわよ!!!」

セシリアは手始めに大きなライフル、スターライトmkIIIをコールし

一夏に向けて発射した。

それを一夏はギリギリでかわすとセシリアは一瞬、驚いたような顔をしたが

すぐさま冷静になり攻撃の手を激しくした。

「さあ、踊りなさい!!!私とブルティアーズが奏でるワルツで!!!」

「おどりは苦手なんだよな」

一方ピットでは4人が観戦していたが筭だけが何故かイライラしていた。

「何故、あいつは攻撃をしないのだ!!それよりも如月!!」
何故、貴様は試合を見ないんだ!!!」

太陽は椅子に座り宇宙についての論文を見ていた。

実は太陽はわずか14歳で国にも認められた天文学者であった。
今の研究対象は専らコズミックエナジーである。

「だって明らかにこの試合は一夏が勝つし、そもそも一夏と闘うんなら

代表候補生じゃ無理。代表でもヴァルキリークラスでようやく勝負になるって言う感じかな」

「如月、何故貴様はそう言える」

千冬はなぜ、そこまで一夏を評価しているのかと聞いたが逆に太陽はこう聞き返した。

「織斑先生は一夏の事はどう思いますか？」

「奴はISに関しては完全に素人だ。今の實力では代表候補生と戦えても勝つことはできんだろう」

「ふ〜ん。ま、良いや。一つだけ言っておきますね。この世界で一夏ほど経験豊富な人物はいませんよ」

「はあ、はあ。試合開始から35分。粘りますわね」

セシリアは息を切らしていたがそれに対し一夏は少しも息を切らしていないかった。

「そりゃ、どうも」

「ですが、これで終わりにしますわ!!!ブルーティアーズ!!!」
セシリアの背中から4機のピットが射出され一斉にレーザーを放ち

始めた。

さらに発射の間隔はバラバラで初心者にはきつい装備だったがそれを一夏は全てかわしていく。

「こいつは俺の最も隙のある部分を狙ってくるのか。それにこれの操作中は」

「奴は他動作不可能になるのか。…そろそろ行くか」

一夏は武装一覧を見るとそこに表示されていたのはまだ、名もなき刀だった。

「ブレード一本…上等…！」

「遠距離武装の私に近距離武装で挑もうとは愚の骨頂ですわ…！」

「それはどうかな？」

一夏は近くにあった一機のピットをブレードで一閃すると爆発が起きた。

「な、そんな…！」

「射撃技術は認めよう。でも、そのスタイルが教科書通りで自分オリジナルが無いから折角の利点が台無しだな。例えば」

一夏はセシリアに向けてブレードを投げつけるとセシリアは慌てて回避したがピットが制御不能になってしまい

その隙に一夏は素手で残りのピットを破壊した。

「な…！」

「ピット操作に集中しすぎて他の事が眼中にないな。さあ、フィナーレと行こうか…！」

一夏はセシリアに一気に近づこうとした瞬間に白式に異変が起った。

突如、白式が輝きだしたのだ。その輝きは余りにも眩しくセシリアは目をつむってしまった。それは観客も同じだった。

「待ってたよ。一夏」

第4話 決・闘・開・始（後書き）

こんばんわ、ケンです!!

如何でしたか？感想もお待ちしております。
それでは

一夏を包んでいた光が消えるとそこには白式を纏った一夏がいるのだが

白式の形状が先程とは異なり、背中には純白の翼が装備されていた。

「ま、まさか一次移行！？フェーストシフト貴方今まで初期設定で戦っていたんですの！？」

セシリアが何か言っているようだが一夏は全く聞かずに武装の一覧を見ていた。

そこにはやはり近接ブレードが1本あるだけなのだがその名前が雪片型式となっていた。

それは一夏の姉、千冬が使い世界最強へのし上がった剣だ。

「そっか俺は姉さんの刀を受け継いだのか」

「雪片型式」

一夏がそう呟くと雪片型式が一瞬にして生成され一夏の手元に現れた。

それを一夏は雪片型式を空に向けてあげそのまま下ろした。

「え？」

一夏が雪片型式を振り下ろすのと同時にスターライトmk？が何かに切られたように折れてしまった。

「あ、貴方一体なにをしましたの！？」

セシリアは困惑しながらも距離を取り残りのビットからミサイルを放つが

一夏はそれを通り過ぎざまに斬り伏せた。

「俺は昔からそうだ」

「何を言ってますの！？」

一夏は止まったかと思うと突然独り言のように呟きだした。

「幼いころから姉さんに世話ばかり掛けて姉さんの自由を俺が奪っていたんだ。あの人だって恋愛や好きな事だっただけだったのに

俺の為にそれらを全部我慢して俺をここまで育ててくれた。
でも、それも今日でお終いだ。俺は姉さんの剣を
受け継ぎ今度は俺があの人を護る！！あの人だけじゃない！！
俺に少しでも関係がある奴は俺が全員、護る！！」

ピット内では先程の一夏の言葉が響いていた。

『幼いころから姉さんに世話ばかり掛けて姉さんの自由を俺が
奪っていたんだ。あの人だって好きな物や好きな事だっただけかっ
たのに』

俺の為にそれらを全部我慢して俺をここまで育ててくれた。
でも、それも今日でお終いだ。俺は姉さんの剣を

受け継ぎ今度は俺があの人を護る！！あの人だけじゃない！！
俺に少しでも関係がある奴は俺が全員、護る！！』

「馬鹿ものが、いつあんな言葉を吐く程成長したのだ」

千冬はその言葉を聞き涙が止まらなかった。

さつきまでまだまだだと思っていた弟がこんなにまで成長し
悲しさもあるが嬉しさが多かった。

「先輩、これどうぞ」

「ああ、すまない」

千冬は麻耶からハンカチを受け取り涙をぬぐうがそれでも
涙の量は変わらなかった。

「さつきから貴方は何を言ってますの！？」

「そんなのは忘れる。これでフィナーレだ」

一夏が雪片式型を撫でるように触れると

エネルギーがチャージされ青白く光り輝き始めた。

「それと俺は手加減が出来ないから注意しろよ」

一夏が雪片式型を振るうと同時にセシリアがミサイルを発射したがエネルギーの斬撃はミサイルを一瞬にして破壊しセシリアに直撃し試合終了の合図が鳴り響いた。

『試合終了、勝者織斑一夏』

その瞬間、アリーナは凄まじい歓声があがった。

先程の戦いを観戦し頬を赤らめるものや自分も負けていられないとやる気が出て気合いを入れる者などもいた。

「『『『『きゃーーーーーー！！！！』』』』」

そんな中で悲鳴が聞こえ一夏は振り向くとISが解除され

そのまま真つ逆さまに落ちていくセシリアの姿が見えた。

どうやら先程の一撃で気を失っているようで動こうとしていなかった。

「セシリア！！」

一夏はすぐさま追いかけるが向こうの方が早く、追い付かなかった。

「ひさつき言ったじゃねえか！！俺に少しでも関係のある奴は

全員護るって！！こんなとこで破ってたまるかよ！！！！」

『力を貸してあげる』

「へえ？」

頭の中に声が響いたと思うとスラスタが全開放され

先程とは比べ物にならない速度が出てギリギリ、セシリアの腕をつかめた。

「あ、危ないところだった。セシリアは…寝てるか」

一夏は教師達にセシリアを引き渡し自分もビットに向かっていった。

「お帰り一夏」

「ああ、ただいま。太陽」

一夏を迎えたのは二人の幼馴染だった。

「強いんだな、一夏は」

「そりゃどうも。でも、まだまだだな」

「織斑……」

「はい」

「そ、そのなんだ・・・お疲れ様」

千冬は顔をそむけながら恥ずかしそうにしながら言った。

「あ、え、はい。それで、セシリアは」

「オルコットはただ、気絶しただけだ」

「そうですか…あゝ疲れた」

「お疲れ様です。織斑君」

振り向くと後ろに白式の待機形態であるガントレットと分厚い本を

1冊

持ち後ろに立っていた。

「今は白式は待機形態で眠っていますが織斑君が呼べば

いつでもきますから。それとこれは専用機持ちの制約です。読んで

おいてくださいね」

「分かりました。太陽、帰ろうか」

「ああ」

「おっけ〜」

その後幕とは部屋の前で別れ今は一人きりとなった。

「あゝ疲れた」

一夏は部屋に入るなりベッドに倒れこんだ。

「シャワーくらい浴びてきたら？汗臭いわよ？」

「んゝ了解」

一夏は疲れと眠気からふらふらとおぼつかない足取りで

シャワールームに入っていた。

一夏がシャワーを浴び始めたのを確認すると太陽は先程の

模擬戦を録画した物を見ていた。

『俺が護る！！！！』

「は〜。やっぱり一夏はカッコいいな〜」

太陽は顔を赤く染めて体をくねらせながら惚気ていた。

一夏とはもう10年近くの付き合いである。それに一夏は格好いいので

太陽が惚れるのも時間の問題だったが中学の時に遂に惚れてしまったのである。

理由は入学式でガラの悪い先輩にしつこくナンパされていたところを一夏に助けてもらったのだ。その時にも、太陽は俺が護ると発言しその時に惚れたのであった。

「流石わ一夏ね〜長年ゾディアーツと闘って来たせいかな戦闘技術は千冬さんにも

引けを足らないほどにまで強くなったし。それにさらにかっこよさに磨きがかかってるし、また惚れ直しちゃった。ふふ」

「あ〜スッキリした。悪いけど俺もう寝るわ」

「うん。御休み一夏」

「ああ、御休み」

一夏はよほど疲れていたのかもの数分で眠りについた。

「ふふふ、一夏。覚悟しててね。絶対に私に惚れさせてあげるから〜太陽は含み笑いをしながら今日の行動は終えた。」

第5話

I was

waiting

Ichika (後書き)

こんばんわ〜宿題に追われているケンです!!
如何でしたか?少し言っておくと今作の白式の
ワンオフアビリティーは零落白夜ではありません!!
どんなものは出るまでのお楽しみ。
皆さん、考えてみてくださいね〜

第6話 努力に失敗はつきもの

「では、1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です!!あ、1繋がり
りで良いですね」

結局あの後、誰からも反対意見等も出ず無事に代表が決まった。

「あ、あの!!」

すると後ろの方から声が聞こえ全員が後ろを振り返るとセシリアが立っていた。

「あ、あの昨日はすみませんでした!!!」

「は?」

「貴方を侮辱した事ですわ。本当にすみませんでした!!!」
セシリアはもう一度深く頭を下げた。

「ああ、良いよ別に。気にしてないし」

「で、ですが」

「良かったらいいの」

「そうですね……これからよろしくお願いしますわ一夏さん」

「ああ、よろしく頼むわ」

一夏の笑顔を見てセシリアは頬を赤くしていた。

この瞬間、クラス生徒の心の中である仮定が生まれた。

セシリア・オルコットは織斑一夏に惚れたなという事である。

「」「織斑君、代表就任おめでとー……………!!!」「」「
放課後に指定した時間に食堂に来てくれと頼まれた一夏は食堂に行
くと

クラッカーの音が何個も鳴り響いて地味に焦った。

テーブルには大量の食事が用意されておりどうやら、祝賀会の様なものらしい

お腹が減っていた一夏はありがたくその食事を頂いていった。

「いや〜でも、ほんとに1組で良かった〜」

「うんうん、ほかのクラスには自慢できるしね!!」

「ならなんでその他クラスの奴らもここにいるんだ?」

「「「気にしない、気にしない!!!」」」

「あっそ」

一夏は食事を再開させると一人の生徒が目の前に来た。

「どうも〜新聞部の取材です。私はこういうものだよ〜」

ご丁寧に渡された名刺には新聞部副部長、黛 薫子と書かれていた。リボンの色から2年生の様だ。

「今話題の織斑君に一言を頂きます!!!クラス代表になってどうかな〜?」

「まあ、地道に頑張っていけますよ」

「んも〜暗いな〜もつと、皆をドキドキさせる事は言えないかな〜」

例えば俺に触れると火傷するぜとか」

「俺に触れると火傷するぜ〜」

「一夏、棒読みで読んでも私はドキドキしないんだからね!!!!!!」
そう言う太陽だがその頬はうつすらと赤くなっていた。

「ま、それは良いとして次は二人目の専用機持ちのセシリアさんだよ〜」

「そうですね、私は」

「一夏さんに惚れちゃったと言っていましたと。じゃあ、写真撮るから二人とも横に並んで〜」

「ちよ、ちよつと!!!」

顔を赤くしながら抗議するセシリアをほったらかしにして
薫子は二人を横に並べカメラを構えた。

「じゃあ、いくよ〜? 10 sec 2 + 10 sec 5は?」

「log310」

「正解」

カメラのシャッターが押されると同時に後ろに全員が入って来ていた。

あの瞬間に入りこむとは恐るべしである。

「み、皆さん!!!!」

「セシリアだけに抜け駆けはさせないよ」

こうして楽しい祝賀会は就寝時間のギリギリまで行われたとき。

場所は変わり体育館。

ここは屋内スポーツの部活が使っているのだが今のところバスケット部しかないのです。

事実上のバスケット部専用の物になっていた。

そこに女子生徒が一人いた。

「何であんな奴がレギュラーに選ばれてるのよ!!!!!!」

一人の女子生徒がバスケットボールを壁に叩きつけて怒っていた。

「あれだけ練習も休まずに行って体力が付くように毎日走ってるのに!!!!!!」

なんであんな練習をさぼるような奴がレギュラーに選ばれるのよ!!!!!!」

女子生徒は怒りをあらわにして何度も壁にバスケットボールを当て続けた。

「はあ、はあ、はあ」

少女がボールを取りに行こうと振り返ったとき後ろにクロークを着たサソリの怪人が立っていた。

「だ、誰よあんた!?!」

「力が欲しいか?」

「え?」

「憎いのだろ?レギュラーに選ばれた者が」

「...ええ、憎い!!!!レギュラーになってる奴らが全員憎い!!!!!!」

「！」
「だったらこれを使うが良い」
サソリの怪人はその少女に一つのゾディアーツスイッチを手渡した。
「宇宙に夢を、星に願いを」
少女はそのスイッチを受け取り赤いプッシュ式のスイッチを押すと
星座が浮かび上がりゾディアーツとなった。
「す、凄い！！力がみなぎってくる！！！！ありがとう、あれ、いない」
お礼を言おうと視線を上げると先程のサソリの怪人はいなかった。
「ふふふ、まあ良いわ。これで、あいつらを痛めつけて私がレギュ
ラーになれる！！！！」

少女がゾディアーツとなる15分前：

「ここがIS学園ね」

髪の毛をツインテールに結び胸はぺったんこの

「あ！？」

ごほん！髪の毛をツインテールに結びかわいらしい少女が校門前に
立っていた。

「あれ？あたし何にいらついでんだろ。ま、良いや。総合受付所だ
ったわね」

少女は総合受付所まで歩き編入の手続きをしていた。

「はい、これで手続きはお終いよ。IS学園にようこそ、鳳鈴音さ
ん」

「あ、織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、話題の子？あの子なら1組よ」

「ふ〜ん。2組のクラス代表って決まってるんですか？」

「ええ、決まってるけどそれがどうしたの？」

「いや〜変わってもらおうかなって」

鈴の顔は何かを企んでいる顔をしていた。

第6話 努力に失敗はつきもの（後書き）

こんばんわ〜前書きにも書きましたが

努力には必ずしも成功が付いてくるわけではない。

これはよくありますよね〜毎日遅くまで勉強したのに
点数が悪かったとかね。ま、そんなのに一々気をまわしてたら
精神がやんじゃいますね。

それよりも如何でしたか？

作者は今回のスイッチャーにはかなり同情できます。

それでは、さようなら〜

第7話 目・標・破・壊

次の日の朝、一夏と太陽が教室に入ると一人の生徒のところへ皆が集まっていた。

不思議に思い近づいていくと机に松葉杖が立て掛けられておりどうやら足を怪我しているみたいだった。

「どうかしたのか？」

「実はね、今朝連してたら怪物に襲われたの」

「怪物……どんな姿していた？」

「え、えっと緑色でまるでカメレオンみたいだった」

その少女は体を震わせ目に涙を浮かべていた。

「ありがと、それと悪いなまた怖い記憶を思い出してもらって」

「ううん、いいよ」

「太陽、どう思う」

二人は周りに聞こえない様に小さな声で話し始めた。

「うん。カメレオンと言う事はカメレオン座のゾディアーツね」

「そうか……調査を頼むわ」

「分かったわ」

その後チャイムが鳴り、SHRをして授業が始まった。

「あ、いい考え思いついた!!!」

「は？」

一夏は昼休みに食堂で昼食を取っていると突然、何かを思いついたかのように立ち上がり叫んだ。

「部活を作ればいいんだ!!!」

「だから、なんでよ」

「最近、ゾディアーツ被害も多くなってきたからさ学園と地球の平和を護る部活だよ!!!早速、会長に言ってくる!!!!」

「あ、ちよつと一夏!!!!」

太陽はトレイを慌てて返却し一夏の後を追っていった。

「ちよつと一夏!!!!」

「遅いぞ、太陽!!!!」

「あのね」

「きやあああああ!!!!」

「!!!!!!」

突然、叫び声が響き渡り慌てて叫び声が聞こえた場所に行くとそこには、襲われている生徒とゾディアーツがいた。

「なる!!!させるか!!!ライダーキーパーツク!!!!」

「うおわ!!」

一夏のとび蹴りを喰らってゾディアーツは横によろけた。

その際に太陽が襲われていた生徒を安全な所まで避難させ、

一夏はドライバーを取りだした。

「ちつ!!!!いいところで」

怪人はそう呟くと透明になってどこかに行ってしまった。

念のためにバガミールで辺りを解析したがどこにもいなかった。

一夏はドライバーをなおして襲われた生徒のもとに近づいた。

「大丈夫か?」

「え、ええ。ありがとう」

「少し聞きたいんだけどいいかしら?」

「ええ。良いわよ」

「まずいつ襲われたの?」

「あたしが倉庫の備品の確認をしようとした時に急に

足を何かで叩かれたような痛みが走って蹲ってたらあいつがいたのよ」

「ふんふん、後あなたは誰かに恨まれたりとかしてないかしら」

「恨まれる事はしてないけど」

「そう、ありがと。立てる？」

「うん、ありがと、助けてくれて」

「ああ」

その後、チャイムが鳴り二人はダッシュで教室に帰っていった。千冬に出席簿で叩かれたのは言うまでもない。

そして、放課後…

終礼も終わり帰ろうとした瞬間に突然、1組のドアが勢いよく開けられ

全員の視線がそちらに向き一夏もそちらを見ると

そこには久方ぶりに会う幼馴染がいた。

「一夏はいるかしら！！？？」

「俺はここにいるから道場破りみたいに入ってくるな」

「何よ、良いじゃない。もう放課後なんだし」

「一夏さん、そちらの方は？」

「ああ、こいつは幼馴染の鈴っていうんだ」

「鳳鈴音よ。よろしくね」

「ここじゃなんだから食堂行こうぜ」

「良いわよ」

一夏はドアの前で話すのもどうかと思い4人を広い食堂に呼び、そこで話をする事にした。

廊下を歩きながら懐かしい話などをしていった。

「にしてもまた二人は一緒なのね」

「まあな〜とところでいつお前はこっちに帰って来たんだよ」

「ま、5日前くらいね。あたしだって中国の代表候補生よ！！」

「へ〜そりやすげえこった」

「あんたほんとに思ってる？」

「まさか」

「あ、あんたね!!!」

鈴が一夏に突っかかろうとした瞬間に何かを壊すような

大きな音が外から聞こえてきた。実際に体育館で部活をしていたバスケ部が

全員避難しているのが見えた。

「な、なんなの!？」

「お前らは先に行つててくれ!!!行くぞ、太陽!!!」

「ええ」

二人は3人を残し悲鳴が聞こえた方向へと走つていった。

取り残された3人は言う事を聞く筈もなくこっそりこっつけていった。

体育館ではカメレオンゾディアーツが用具を壊しながら暴れていた。

『全部ぶっ壊してやる!!!』

カメレオンは長い舌を使いタイマーや

得点板などを次々と破壊していった。

先程まで気合いの入った掛け声は聞こえず今は悲鳴だけが響いていた。

「な、なんなのよあれ!!!」

「ひとまず逃げなさい!!!」

「先生は!!!???」

「私は貴方達を守る義務があるから」

バスケ部の顧問らしき教師は生徒を避難させながら少しでもゾディアーツ

を止めるべくボールをぶついたりなどしていたがゾディアーツには無意味だった。

『あんたがいけないのよ!!!全部、あんたがいけないんだ!!!』

！」

「待て！！カメレオン野郎！！！」

『また、お前たちか！！』

「貴方達何してるの！？早く逃げなさい！！！」

「そう言う訳にはいかないんですよ。太陽」

「ええ、先生は任せて頂戴」

太陽は教師を戦いの邪魔にならない所に避難させバガミールを起動させカメレオンゾディアーツの解析を始めた。

「さあ、行くぜ！！」

『3・2・1』

「変身！！！！」

一夏は箒達が物陰に隠れて様子を見ている事に気付かずに変身をした。

「な、何あれ！？」

「一夏さんが」

「変った」

「宇宙来たーーーー！！！！！！」

『また、邪魔する気！？』

「当たり前だ！！」

『ロケット・オン』

「ライダーロケットパンチ！！！！」

『きゃ！！！！こんな所で止めるわけにはいかないのよ！！！！』

カメレオンは再び体を透明にして逃げ去ってしまった。

「あー！！！！また逃がした！！！！！！」

「一夏！！！！」

「太陽、どうだった？」

「解析は出来たけど……」

「ん？」

太陽が見ている方向をたどってみるとそこには

「げ！何でお前達が！？」
そこには先程置いてきた3人の姿があった。

第7話 目・標・破・壊（後書き）

如何でしたか？感想もお待ちしております!!!

オリスイッチも集めてみようかな？と考え始める自分でもあります。

年内更新は出来るだけしますがしない場合もありますので。

それでは!!!!!!

第8話 先・生・失・望

一夏は自室に3人を呼び先程の事を説明していた。

「一夏、さっきの怪物はなんなのよ」

「あれはゾディアーツって言ってスイッチを使って変身するんだ」

「では、一夏さんの先程の姿も」

「全然違うわよ。一夏が使っているのはアストロスイッチ、向こうが使っているのはゾディアーツスイッチ」

「違いが分からんが要するに一夏はそのゾディアーツとやらを倒しているのか？」

「ああ、そう言う事になる。悪いな今まで黙ってた」

「別に良いわよ。どうせあんたの事だから」

私達を巻き込ませない為に黙ってたんでしょ」

「ああ。この事は黙っててくれないか？」

「ああ。それと私達にも手伝わしてくれないか？」

「へ？」

「そうですね！！二人だけでは何かと不便でしょうから」

私達も手伝わせて頂きますわ！！！」

「はは、ありがとな皆」

「それであたし達は何をすれば良いのよ」

「スイツチャーの目星は付いてるわ。でも、」

まだ確証が無いから何とも言えないけど」

「その人の名前は何ですか？」

セシリアが質問すると太陽はデータ解析の画面を見せその人物を見せた。

「名前は高梨ゆり。学年は私達と同じよ」

その人物を見た瞬間、篝が声を上げた。

「こいつなら知っているぞ」

「ほんとか!？」

「ああ。こいつは確かバスケット部だったはずだ。私が朝稽古に行く時いつもボールをドリブルしながら走ってるのを見ているから間違いない」

鈴が何かを思いついたように話し始めた。

「ねえ、確か襲われた人って全員バスケット部のレギュラーだったわよね？」

「ああ、そつだよな太陽」

「ええ、確かにバスケット部だけどそれが？」

「例えばよ、自主連も練習も頑張ってるのに自分がレギュラーに選ばれなかったっていう腹いせでスイッチを悪用してるんじゃないかしら」

「確かに、襲われてるのはレギュラーのメンバーが多いわね。一夏」

「ああ、決まりだな。皆、ありがとう」

「ふふ、このくらいなんてことはありませんわ。また、言ってくれば何度でもやりますわよ」

「よし、ならお前ら仮面ライダー部の部員になれ!!!」

「か、仮面ライダー部？」

「そつだ!学園と地球の平和を護る部活だ!!!」

「へへ面白そうじゃない。あたしは入るわ」

「私も偶になら顔を出そう」

「わたくしも良いですわ」

「よし、ここに仮面ライダー部結成だ」

「「おー!!!」」

その後、騒ぎすぎて寮長の千冬に叩かれたのは言うまでもない。

翌日、高梨は最後の標的を狩る為にある人物を体育館に呼んでいた。

すると体育館のドアが開き入ってきたのはバスケット部の顧問の
柘美琴ひいらぎだった。

「話って何？高梨さん」

「ふふ、先生、私練習頑張ってますよね」

「ええ、他の子達と比べたら練習量は多いわね」

「でも、先生は練習さぼってる奴をレギュラーにした」

「それは実力を考えて」

「うるさい！！先生は実力何か見ていない！！」

あいつよりも私の方が上手いのに私を外した！！！！」

「ちよ、ちよつと待って高梨さん。確かに貴方は1年生の中では

一番上手よ。でもね、貴方は」

「うるさい！！あたしはあんたを許さない！！！！」

高梨がスイッチを取りだし押しかけた時、

スイッチが何かに狙撃されて手から離れた。

「だ、誰よ！！！！」

撃たれた方向を見るとセシリアがスターライトMK？で狙撃をして
いた。

そこには仮面ライダー部の部員もいた。

「そこまでだ。高梨さん」

「織斑一夏！！！！！！」

高梨は一夏を睨みつけた。

「スイッチを使うのはやめろ」

「うるさい！！あたしの気持ちなんか分からないでしょ！！！！」

「ああ、分からないな。でも、この先生がお前を外したことは間違
つてないぞ」

「どういう意味よ！？」

「俺さ、この前にバスケット部の人に高梨さんの練習試合の様子を
録画したやつを見せてもらったんだ。確かに上手かったよ」

「だったら！！！！」

「でもさ、自己中プレーが多いんだよね、一人で」

勝手にドライブしたり撃つべきじゃない時にシュート撃つしおまけにチームメイトの事なんか頭に入っていないし。だから、外されたんだよ」

「うるさい、うるさい、うるさい!!!」

『ラストワン』

高梨の感情に呼応するかのごとくスイッチが変化し浮かびあがり高梨の手に戻っていった。

「止める!!!自力で人間に戻れなくなるぞ!!!」

「それでも良いわよ!!!こいつをぶっ潰せるならね!!!」

高梨がスイッチを押すとカメレオン座が浮かび上がり体が繭に包まれ排出され精神だけがゾディアーツとなった。

『そら!!!』

「きゃ!何よこれ!?!」

カメレオンゾディアーツは舌を伸ばし柁を捕らえると屋上に飛び移りさらっていった。

「あ、やべえ」

「一夏!!!あたしが連れていくわ!!!」

「ああ、頼む」

一夏は鈴の甲籠(シムロン)に捕まり運ばれながらドライバーをつけた。

『3・2・1』

「変身!!!」

「これが、フォーゼ」

「ああ、ありがとな鈴」

一夏は屋上に飛び降りるとカメレオンゾディアーツが柁を壁際に押し込み落そうとしていた。

「動かないで!!!こいつを落とされなくなかったら動かないで。そして、変身を解きなさい!!!」

「あの野郎!!!」

「はは、先生、がっかりだな」

「何!？」

「え、ちよ」

柘は一夏の方を向き小さくうなずくと一夏も何かを

感じたのかそのまま黙り、手にはNO.5マジックハンドスイッチが握られていた。

「私は貴方には期待していたわ。この子は将来、素晴らしい選手になるって」

「だ、黙れ!!!」

「でも、レギュラーを外されたくらいでここまでするなんて正直失望したわ」

「言つてな!!!」

「きやあああああ!!!」

柘が落とされた瞬間に一夏はすばやくマジックハンドに変え、スイッチを入れた。

『マジックハンド、マジックハンド・オン』

「そら!!!!!!」

一夏が腕を伸ばすとマジックハンドもそれに合わせるようにして伸びて柘をキヤッチした。

「な、何よそれ!？」

「体が伸びるのはなお前だけじゃないんだ!!!」

「あたしをわざと怒らしたわね!？」

「貴方は少し短気な方だからね」

「でも、正直危なかったですよ？」

「女性を護るのが男性の仕事でしょ？」

「はは!!!んじゃ、タイムンはらせてもらっぜ!!!」

「くそ!!!!」

カメレオンゾディアーツは一夏に向かって舌を伸ばし攻撃しようとするがそれを避けながら近づきカメレオンゾディアーツを掴み

下に落とすした。

「こつちだ!!」

「きゃあああああ!!!!」

下に落とすと起き上がる暇も与えずに一夏はカメレオンゾディアーツを掴み

頭突きをかまし足を引っかけ背負い投げの要領で投げ飛ばした。

「くそ!!」

『ランチャー、レーザー・オン』

「これでもくらえ!!」

一夏はレーザーでロックオンしミサイルを4発撃ちこむとカメレオンゾディアーツは空中に浮かんだ。

「ああああ!!!!」

「よし、止めだ!!!!」

一夏はマジックハンドからロケットに変えスイッチを入れた。

『ロケット、ドリル・オン。ロケット、ドリル・リミットブレイク』

「喰らえ!!ライダーロケットドリルキーーック!!!!!!」

「あああああ!!!!!!」

ドリルがカメレオンゾディアーツを貫き爆発を起こした。

空からはスイッチが落ちてきた。

「よつと」

スイッチをOFFにするとスイッチは消滅し高梨が目を覚ました。

「ん、ん」

「良かった。目を覚ましたのね、高梨さん」

「せ、先生。ごめんなさい!!!!私の所為でレギュラーの皆が」

「ううん。私も悪かったわ。貴方に何も言わずにレギュラーを外したりして。クラブは当分は休部ね」

こうして、無事に高梨は元に戻り休部が解除された後の試合で劇的にプレーが変化したのは言うまでもない。

第8話 先・生・失・望（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？相変わらず文章表現が下手すぎて泣けてきます。感想もお待ちしておりますので。それでは

第9話 優・入・者

あれから、数日後。一夏たちは仮面ライダー部となった皆にラビツトハツチ

の事を教えそこが部活の拠点となった。

「おゝ浮いてる、浮いてるゝ」

「ちよつと、鈴さん!!!勝手に重力を変えないで下さいまし!!!」

「良いじゃないのよゝこんな経験滅多に出来ないんだし」

「確かにそうですがその所為で色々と浮いてますわよ!!!」

部室には個人の色々な物が置いてありそれが重力が

6分の1になった所為でふわふわと浮いていた。

「ちえゝ」

鈴は渋々グラビティコントロールのスイッチを押し重力を元に戻した。

「ふゝやつと落ち着けますわ」

「でも、まさか宇宙に行けるなんてねゝ」

「そうですね」

「そろそろ行くぞ。時間だ」

「おっけゝ一夏、負けないわよ!!!」

「それはこつちの台詞だ」

実は今日はクラス別代表トーナメントの当日であり

対戦表は先程太陽に見てきてもらうと

一回戦から鈴と一夏があたるらしい。

筈は先に行つてると言つてピットで待機している頃だろう。

四人も早歩きで会場へと向かった。

会場となる第3アリーナは観客に溢れておりそこには各国の主要人物がVIP席で観戦をしていた。

いつもこのくらい多いのだが今回はちよつと違った。それは織斑一夏の存在である。

各国は使えれば引き抜くという姿勢を取っているが

委員会からは織斑一夏の配属国家はこちらで決めると言い張り日夜、論争が繰り広げられていることを一夏達は知らない。

「そろそろ時間か」

一夏はピット内の椅子に座っていたが時計を確認すると上着を脱ぎISスーツに着がえた。

「一夏さんなら大丈夫ですわ!!!」

「勝つて来い!!! 私達は応援しているぞ!!!」

「ま、楽に行つてきなさいな」

「ああ、じゃ、行くか。白式」

一夏がガントレットに手を置くと一夏が光に包まれ白式を纏いフィールドへと向かった。

「待つてたわよ、一夏」

既にフィールドには鈴が立っており気合い十分といった雰囲気を感じられた。

「あたしの強さ見せてあげるわ」

「その言葉そつくりそのまま返すぜ、鈴」

アリーナに試合の始まりを告げるブザーが鳴り響くと両者、武装を展開しぶつけあった。

「やるじゃない。初撃をかわすなんて」

「そりゃ、どうも!!!」

一夏と鈴は武装を振るい続け火花を撒き散らし続けた。

「一旦、距離を取るか」

一夏が距離を取ろうと後ろに下がろうとした瞬間…

「甘い!!!」

甲龍の肩のアーマーがスライドすると何か銃口に似た物が見え
一夏は本能的に何かを感じ翼を出し高速で上空へとあがると
地面が何か砲弾が当たったように抉れた。

「やるじゃない。でもあれはジャブだからね!!!」
そう言い砲身も砲弾も見えない弾丸が襲いかかってきた。

あれから数分経つが一夏はフォーゼで鍛え上げられた感覚で
避けているがやはり完全には避けきれず何回か掠ったりもした。

「やるじゃないの。初見で龍砲が
直撃しないのはあんたが初めてよ」

「そりゃ、どうも。じゃあ、俺も秘密兵器を出そう」

「は、何を言ってる」

一夏が剣道の突きを距離が離れているのにも関わらずした瞬間、
甲龍の肩が爆発を起こした。

「え?」

一方、ピット内では篤達が今の光景に驚いていた。

「一夏はいつたい何をしたんだ?」

「確か私も似たような攻撃をされましたわ」

代表を決める模擬戦でセシリアは距離が離れているにもかかわらず
一夏が剣を振るうと武装が爆発し破損した経験をしていた。

「如月、お前はあれをどう見る」

「織斑先生が思ってるのと同じですよ。一夏は雪片式型の
刀身を不可視のエネルギーで伸ばして攻撃してますね」

「そんな事は可能なんですか?」

「いや、私も長くISに関わっているがこんな事例は初めてだ」

「ああ！！ブリ○チの神○ですね！！凄いです！！」
何故か山田麻耶だけが一人で感激していた。

「さっきまでの威勢はどうした？鈴」

「うっさいわね！！こっからが本気よ！！」

「そりゃ楽しみだ」

鈴はそう言うが実際はかなり劣勢だった。まるで刀が伸びているように遠距離から攻撃を受け既にエネルギーは5割以上削られている。しかも一夏はそう毎回遠くからの刀の攻撃をする訳でもなくだましを入れたり等もう鈴はパニックッていた。

「もう龍砲も片方しか生きてないし一夏にもそう

ダメージは与えてないし。わたしが勝つにはあれしかないわね」
鈴は何か策を思いついたのか一夏に丸腰の状態が無謀にも突撃していった。

「何をやる気か知らないが、これで終わりだ！！！！」

一夏が雪片式型の刀身を撫でるように触れるとエネルギーがチャージされていき青白く光り輝いていた。

「喰らえ！！！！」

剣を振るうとエネルギーの斬撃が飛び鈴に直撃し爆煙を上げた。

「やったか？」

「まだに決まってるんでしようが！！！！」

爆煙の中から鈴が瞬間加速イグニッションブーストを使い

一夏に抱きつくようにして密着した。

「な、しま！！」

「遅いわよ！！」

甲龍の龍砲が最大威力で放たれ両者とも大きくエネルギーを削られた。

「く…そ」

「まだよ！！これで最後」

鈴が止めの一撃を加えようとした瞬間、突如アリーナのシールドを荷電粒子砲が突き破り大爆発を起こした。

「な、なんなの？」

そこには腕が異様に長くスラスタも非常に大きいものを備え付けている真っ黒なISが姿を現した。

第9話 優・入・者（後書き）

連続更新です!!!!!!
それでは!!!!!!

第10話 リミットブレイク

「あ？あいつ、一体なんなんだ？」

「さあ？こつちが聞きたいわよ」

すると黒いISは体中に銃口のような穴があき辺りに無差別に荷電粒子砲を放ち始めた。

「きゃあ！なんなのよ、あいつは！！出鱈目に撃ち過ぎでしょ！！」
「しゃべるよりも避ける馬鹿！！！」

『織斑君、鳳さん！！すぐにアリーナから脱出してください！！
教師陣達が鎮圧に向かいますから！！！！』

オープンチャンネルから麻耶の声が聞こえてきた。

かなり焦ってるらしく声に出さなくてもいいものを
声に出してまで叫んでいた。

「そうしたいんですがね山田先生、俺達がここを退くと
皆が危ないんですよ」だから、俺たちであいつをぶっ潰します」

『え、ちょ、織斑k』

一夏はチャンネルを閉じると雪片式型を強く握り締めた。

「鈴、邪魔すんなよ。あいつは俺達の戦いを

邪魔したんだ。俺がぶっ潰す！！！」

「はいはい。あんたは昔からそうよね。自分のしてる事とかに

邪魔されたくないしね。でも、援護はさせてよね。あいつやばそう
だから」

「ああ、行くぞ！！」

「ちよつと織斑君！？鳳さん！？聞こえますか！！！！！！！！」

「良いではないか山田君。あいつらがすると

言ったんだ。任せてみるのも良い」

そう言い千冬はコーヒの入ったカップに七味トウガラシを入れて

いた。

ピットは薄暗いので勘違いもするだろうがそれだけ心配なのだろうか。

「あの先輩、それ七味ですけど」

「……………何故、七味がここにある」

「あー！心配なんですネ！？いくら弟さんが強くても

ああやって助けも当分来ない密閉された空間に閉じ込められて」

「喰らえ」

「うぎやあああああああ！！！！目が！！！！目があああああああああああ！！！！」

「私は親族ネタでおちよくられるのが一番嫌いなんだ。肝に銘じておけ」

千冬は麻耶の目に少量の七味を入れたのだ。

実際に体験した人なら分かると思うが七味はめっちゃ痛い。

本当に痛い。よい子はマネしない様に。

しかし、誰も一夏の事を心配などしていなかった。

太陽は論文を読み、セシリアは落ち着いた表情でモニターを見ていた。

その為に筈がピットから出ていったのには誰も気づいていなかった。

一方、戦っている当人達は少し苦戦していた。

先程まで闘っていた為に鈴は龍砲の片方をやられさらには

エネルギーも7割がた失い、一夏は先程の鈴の捨て身の攻撃で

5割も削られていた為にそうそうエネルギーを使えなかった。

「なる！！」

一夏は先程の見えない刀身で相手を攻撃していくが何故か

直撃せずにどれもかすり傷しか与えられなかった。さらには、

人間には耐えられない程の速度で移動したりなどしており

フルスキン
全身装甲という点でも疑問を持っていた。

「なあ、鈴」

「何よ」

「あいつ奇妙じゃないか？まるで俺達の攻撃を機械が避けてるような避け方をしてねえか？」

「まあ、そんな感じはするけどISは人が乗らないと動かせない。それが鉄則よ……と言いたいけどあれは」

「無人機かもな。なら好都合だ」

「何？無人機なら勝てるの？」

「ああ。思う存分やれる」

一夏が雪片式型のエネルギーをチャージしようとした瞬間にアリーナに箒の音が響いてきた。

『一夏……！……！！……！！……！！……！！』
敵に勝たんか……！！……！！……！！……！！』

「な！あのおバカ！！」

無人機は箒という新たなターゲットに照準を合わせようとしていた。

一夏は雪片式型をフルチャージし無人機に向かって投げると

まるでポインターの様に刀が形態変化を起こした。

「俺の友達は何にもやらせねえぞ……！！」

一夏は翼で上空に飛ばたくとポインターに合わせるように

蹴りを入れるとポインターがドリルの様に回転し無人機を貫いた。

「ふい〜終わつたか」

一夏がその場を去ろうとした瞬間にチャンネルから鈴の音が響いてきた。

「一夏……！まだ、そいつ動いてるよ……！！」

「……！！……！！……！！」

一夏が振り向いたと同時に最大威力の

荷電粒子砲が一夏を飲み込んだ。

「俺はこんな所で死ぬのか？」

一夏は荷電粒子砲に飲み込まれながらそう考えていた。頭の中にはまるで走馬灯のように太陽達との記憶が流れていた。

「死ぬない！！！！こんな所で死んだら太陽を助けられない！！！！」

白式、俺に力をくれ！！！！あいつらを、太陽を護る力を！！！！」

『ふふ、聞いたよ』

「い、一夏」

鈴は絶望しながら目の前の光景を見ていた。

白式のエネルギーはもう既に少ないのに最大威力のあれをくらっては絶望的と思わざるを得なかった。

すると、その時鈴の耳に電子音声が流れるのが聞こえた。

『リミットブレイク』

「え？」

すると次の瞬間、荷電粒子砲が弾け飛びそこには一夏が

立っていた。無人機は先程の攻撃でエネルギーが尽きたのか

完全に機能を停止した。

「うう」

一夏はその場に倒れた。気を失う寸前に最後に見えたのは

涙を流しながらこちらに近づいてくる太陽の姿だった。

ここで少し世間話をしよう。

如月太陽という少女は外見は普通の女の子だが内面は異常である。

その理由は幼いころに幾度となく誘拐を受けたからであった。

彼女の父親は宇宙飛行士でその影響で太陽も宇宙に興味を持ち

最年少の天文学者となったわけであるがその父親もコスミックエナ

ジーの

研究に同僚と共に勤しんでいたのだが同僚の一人に裏切られ

月面基地、つまりラビットハッチに一人取り残された。そこでフォーゼシステムとアストロスイッチを開発しこの世を去った。そしてそのシステムは娘の太陽へ継がれたのだがこのシステムを悪用せんとする組織に幾度となく誘拐を受け誰も信じなくなった。それは母親も含まれており話した回数は両手の指の本数よりも少ないのかもしれない。母親は滅多に帰ってこず何をしているのかも不明。そして、5歳の時に再び誘拐された時に織斑一夏と出会い何故か彼だけは信じれると本能的に悟り、以来一夏にしか心を開くことはなくさらに一夏の事を愛している。だが、その度合いが異常だった。彼はいわゆるイケメンと呼ばれる部類でよく、ラブレターなどを貰っていたのだがそれを太陽が一夏に気付かれる前に回収し燃やした。そして極めつけは直接手を下したこともあるのだがそれはまた別の機会に語ろう。

77

「ん、ん〜。こっちは」

一夏が目覚ますと薬品のおいがうつすらとする医務室だった。

「目を覚ましたか、一夏」

「千冬姉」

隣には千冬が椅子に座っていた。

「全くお前は本当に無茶をする。怪我でもされたらこっちが困るんだぞ」

「ごめん、鈴は大丈夫なのか？」

「ああ、鳳はピンピンしているさ。今は事情聴取してるがな」

「そっか」

「私はこれから仕事があるから行く。それと」

「ん？」

「もうそいつを悲しませるなよ。一夏」

その言葉を残し千冬は医務室を後にした。

何を言っているのか分からない一夏だったがふと隣を見ると

太陽が隣で眠っているのに気付いた。

目の下には涙の跡がうつすらと見えていた。

「こう言う意味か……ごめんな、太陽」

一夏はそつと太陽の頭を撫でもう一眠りする事にした。

場所は変わりここはIS学園、地下研究所。

一定以上の権限がないと立ち入れない場所に千冬が座っており

目の前には先程の撃破された無人機、それに戦闘の映像が流れていた。

「織斑先生」

「どうでしたか、山田先生」

「解析の結果、織斑君の最後の一撃で機能中枢がやられており

復元は不可能でしたがコアは無事でした」

「それでそのコアは」

「はい。無所属のコアでした」

「……そうか。それで、例の件は」

「解析班によると最後の白式の技はISのエネルギーでは無いそうです」

「どういう意味だ？」

「分かりません。なんらかのエネルギーが白式に流れ込み変化を起こしているようです」

「そうか……引き続き頼む」

「はい」

麻耶は一礼をして職場に戻っていった。

千冬は重い表情で一夏が最後にした技を何度もリピートしていた。
「一夏、お前は一体何を抱えているんだ？」

第10話 リミットブレイク（後書き）

こんばんわ〜こんばんわ〜。

確かこれに似た歌が昭和にあったはず。

たしか万国博覧会の時の歌だったかな？

そんな事はどうでも良くて、如何でしたか？

宿題が多すぎて忙しすぎるぜ。

それでは、良いお年を！！！！！！

第11話 勸・善・懲・悪

あれから一夏は怪我也それほど無いとこのことで普通の日常生活に戻っていた。

勿論、仮面ライダー部の活動も行っている。

しかし、問題が一つあった。それは……

「は！？何でダメなんですか！！会長！！！！」

昼休みに仮面ライダー部を作る許可を貰おうと

生徒会室にいるのだが返答はNOだった。

「駄目なものは駄目なのよ。そもそも活動内容が活動内容だから余計に承諾できないのよね」

会長の楯無は要求棄却と書かれた扇子で仰いでいた。

「なんでなのよ！？この学園と地球の平和を護るなんて

これ以上の内容は無いじゃないのよ！！」

鈴はいら立ちを隠さずに年上の楯無にため口で文句を言っていた。

「だから部活にはそれぞれ予算が振り分けられるんだけどね、

今の学園の考えは予算は出来るだけISに回そうっていうものなのよ

だから無駄遣いはするなって上からうるさく言われてるのよね」

「あんたも一夏に助けられた癖に？」

太陽はジト目で楯無を睨んでいた。

「そ、それはそれ。これはこれ」

結局、その後も粘ったが許可は一向に降りなかった。

「あゝもう！！なんで、ダメなのよ！！！！」

「落ち着いて下さい、鈴さん。あの人の言い分も最もですし

ここでは会長の権力は大きいですから」

「ま、良いじゃねえか。学校に認められなくとも

俺達は俺たちで活動するし予算なんかなくても出来んだしさ」

一夏と太陽はスイッチの調整室でスイッチを調整していた。すると、スイッチが突然バチバチとまるで電流が火花を散らすような音が聞こえてきた。

「なんなの？このスイッチ。他のよりもコズミックエネルギーの量が比較にならないほど大きい」

「どれどれ」

一夏がスイッチに触れようとした瞬間、突然ガントレットが淡く輝き始めた。

「このスイッチ、白式と共鳴しあってるのではありませんか？」

「あゝ確かに。セシリアの言うとおり白式も反応してるわね」
いつのまにか調整室に入って来ていた二人が

白式とスイッチを交互に観察し始めた。

「そのスイッチなんて名前ですか？」

「NO10エレキスイッチよ。一応、調整は出来たけど使えるかどうかは正直怪しいわね」

すると、突然太陽の所有物のカバンから電話のコール音が鳴り響いてきた。

「偵察していたバガミールからの連絡だわ」

画面にはゾディアーツと襲われている女子生徒がいた。

「な、なんなのよ！？あんたは！！」

今話している生徒、メリー・クリスは目の前にいる怪物に驚きのあまり腰を抜かしていた。

『貴方はテストでカンニングをしていた』

「そ、それが何よ！！」

『悪は許さない！！！！』

ゾディアーツはメリーに向けて殴りかかろうとした瞬間に何かに後ろから殴られ吹き飛んでしまった。

『誰！？』

そこには黄色いロボットがいた。名前はパワーダイザー。胸にあるコクピットのような所から太陽が額に汗を流して降りてきた。その呼吸はかなり乱れていた。

「はあ、はあ、はあ。あんたは、はあ、逃げなさい」

「あ、ありがとう！！」

「大丈夫か、太陽！！！！」

後ろから一夏達が走ってきた。

「ま、なんとかね。それよりもあいつは

一角獣座、ユニコーンゾディアーツよ」

「分かった。お前は休んでろ。セシリアと鈴はこいつを見てくれ」

「分かったわ」

「頑張ってくださいね！！」

「おう」

一夏はドライバーをつけスイッチを入れていくとカウントがはじめられた。

『3・2・1』

「変身！！！！」

空高く手を上げると頭上に輪っかが現れ、一夏がフォーゼに変身していった。

「ん〜宇宙来たーーーー！！！！！！！！！！」

『か、仮面ライダー！？』

「何だ知ってんのか？ま、良いや。仮面ライダーフォーゼ。

タイムンはらせてもらうぜ！！！！！！！！」

『ロケット・オン』

一夏はロケットスイッチを入れると腕にロケットモジュールが現れた。

「ライダーロケットパーーンチ！！！！！！！！」

『きやーーーー！！！！！！』

一夏はロケットの噴射でユニコーンに近づき文字通りロケットでパンチを加えた。

「あれを試すのはいい機会ね。オルコットさん、これを一夏に渡してちょうだい」

「分かりましたわ。一夏さん!!!」

「ん？」

「新しいスイッチですわ!!!」

「おう!!!試させてもらうぜ」

セシリアは一夏に向けてエレキスイッチを投げ渡すと

一夏はすぐさまロケットスイッチと交換をした。

『エレキ』

スイッチを入れると静電気のようにバチっと言う音がした。

「ん？ま、良いか」

一夏はそんな事など気にも留めずにエレキスイッチを入れた。

『エレキ・オン』

すると右腕に電流が流れ込みロッドが現れ右腕の肘から

下だけが金色に染まった。

「剣?というよりロッド?」

『余所見しないで!!!!!!』

ユニコーンが一夏に走って近づいていくが一夏はロッドを

横にして持っていた為にユニコーンにあたるとユニコーンは吹き飛ばされた。

『な、何あれ!?!』

「お、すげえじゃん。行くぜ!!!」

一夏がロッドでユニコーンを切りつけた瞬間、両者にロッドの電流が流れ込み感電してしまった。

『ぐう!!!』

「あぎゅげぎゃぎえぎよ!!!」

「パワーが逆流してるの?」

「逆流するぐらいに強いつてどんなのよ」

肩を借りて立っている太陽の眩きにツツコミを入れる

鈴だが、太陽の言うとおりの何度も切りつけているがその度に

一夏とユニコーンの両者が電流でダメージを負っていた。

『ここは一旦逃げる！！！！はあ！！！！』

「うおー！！」

ユニコーンは手からチャクラムのような形の怪光線を

地面へとぶつけその爆煙でどこかへ逃げていった。

「くそ！！逃げられた！！」

あれからラビットハッチに一旦戻り太陽はしんどいので保健室に行く
と教師に言つてそこでバガミールの映像の解析を行うという。

残りのメンバーは箒にも内容を話し放課後にスイッチャーの
目星を自分たちでもつけていく事にした。

鈴は1年生の生徒たちに聞いていきセシリアは教師達に

箒は他の部活との交流が唯一あるためクラブ生に聞きにいった。

そして、一夏は上級生に聞きにいった。

「あ、ちよつと良いですか？」

「あ、織斑君じゃん。なに？」

「最近、変わったな〜っていう人とかいませんか？」

「ん〜特には見ないけどね〜」

「そうですか。ありがとうございます」

「また今度、部活見学に来てね〜」

「は〜なかなかいねえもんだな〜。それにしても、

こいつ中々凶暴だな〜」

一夏はポケットからエレキスイッチを取りだしまじまじと眺めていた。

「どうすればこいつとも友達になれるかね、ぐえ！」

スイッチを見ていた為に前を見ていなかった

「夏は曲がり角で誰かとぶつかってしまった。」

「痛たたた、大丈夫か…ってちふ、じゃなくて織斑先生」

「ああ、すまないな。大丈夫か？」

「あ、はい。こつちこそすみません。それじゃ！！」

「夏は情報収集をするべくその場を去っていった。」

「全く元気がいいことだな…ん？これは、なんだ？」

千冬の足もとには黄色のスイッチ、エレキスイッチが

転がっていた。

「あいつのか？…いや、あいつがこんな物を集める訳はないか」

そのスイッチを千冬はポケットに入れ自室へと向かっていった。

第11話 勸・善・懲・悪（後書き）

こんばんわ〜ケンです。如何でしたか？

今回のスイッチャーは多分タイトルで分かると思います。
感想もお待ちしておりますので、それではよいお年を。

第12話 夜・間・戦・闘

放課後、一夏たちは太陽からスイッチチャーが分かったと連絡を受けラビットハッチに集合していた。

「もう体は大丈夫なのか？太陽」

「ええ。少し休んだら具合は良くなったわ。それよりもスイッチチャーの話よ」

「ああ、頼む」

太陽は解析データの画面を見せるとそこにはスイッチチャーと思われる少女が映っていた。

「この子がスイッチチャーですか？」

「ええ。名前は更識簪。生徒会長の実妹で日本の代表候補生よ」

「でも、なんでこいつがスイッチチャーだつて分かったのだ？」
簪の質問に太陽はもう一つの映像を見せた。

「今回は偶々、バガミールにその瞬間が映ってたわ。これがその映像よ」

太陽はバガミールの映像を皆に見せるとそこにはスイッチチャーを持った更識簪と襲われたメリー・クリスの姿がはつきり映っていた。
「でも、なんで彼女は襲ったのでしょうか？」

「そこまで詳しくは分からないわ。もつと詳しく調査してみないと」

それから晩ご飯も食べシャワーを浴びた一夏はなんとなく外をぶらぶら

したいと思いい何故かついてきた太陽と夜の学園を散歩していた。

「なあ、太陽」

「何？一夏」

「なんで皆、こんなにもスイッチチャーに魅せられるんだろうな」

「分からないわ。この学園でもスイッチがばら撒かれてるみたいだし、

誰がどこで何の目的で配っているのか分からないのが実態ね」

「そうだよな……あれって」

一夏が指をさした方向を見てみるとそこには青い髪の毛をした生徒が何かを手に握りしめていた。

「もしかしてあいつ」

「ええ、行きましょう」

二人はそつとその生徒に近づいていくとぶつぶつと呟いているのが聞こえてきた。

「ふふふ、これで悪い事をした人は残り10人。

この力で悪を懲らしめられる!!!!!!」

「それはちよつと違うな」

「だ、誰!?!」

「俺は織斑一夏。さっきの話は聞かせてもらった」

「その声、貴方が放課後の時に邪魔した仮面ライダー?」

「ああ、そうだ。君なんだろ?あの

ユニコーンゾディアーツは。更識簪さん」

「もうばれてたんだ。凄い情報収集力だね」

「私をなめないでよね。女一人の情報くらい引き出せるわよ」

「貴方達も私の邪魔をするの?」

「邪魔じゃない。君を救うんだ」

「じゃあ、貴方達も悪だ!!!!!!」

簪はポケットからスイッチを取りだしボタンをプッシュすると一角獣座が浮かび上がり簪がユニコーンゾディアーツとなった。

『私はこの力で悪を懲らしめる!!!!!!』

「正義のヒーロー気取りもいいとこだな。太陽下がってきてくれ」

「ええ」

一夏は太陽を下がらせるとドライバーを取りだし腰につけスイッチを押していくとカウントがはじめられた。

『3・2・1』

「変」

『させない!!!!!!!!!!』

ユニコーンが一夏がレバーを引く瞬間に腕からチャクラム状の怪光線を放ち変身を邪魔しようとしたが一夏の手元に雪片式型が現れると怪光線を斬撃を飛ばして全て落としてしまった。

『そ、そんな!!!!!!!!!!』

「残念だったな!!!!!!!!!!そんなの経験済みなんだよ!!!!!!!!!!変身!!!!!!!!!!」
気を取り直し一夏はレバーを引きフォーゼへと変身した。

「宇宙：って今は夜か。宇宙来た〜」

一夏はいつもの音量ではなく小さい声で決めゼリフを言った。

「タイムンはらせてもらうぜ!!!!!!」

『チェーンソー・オン』

一夏は左足にチェーンソーモジュールを呼び出し切りつけていくがユニコーンはそれを腕で防いでいた。

「おら!!!!!!」

『くう!!!!!!』

「やるじゃねえか!!!!!!」

「一夏!!!!!!」

「ん?」

「新しいスイッチ!!!!!!ビートとチェーンアレイ!!!!!!」
受け取ったスイッチには12、13と書かれていた。

「お、サンキュ〜さっそく使わせてもらうぜ!!!!!!」

『ビート、チェーンアレイ』

「押しにくいなこのスイッチ」

『チェーンアレイ、ビート・オン』

一夏の右腕に鎖に鉄球がつながったチェーンアレイが、右足にスピーカーが現れ

スピーカーからかなり高い音が出てユニコーンは思わず耳を塞いだ。
『うう!!!!!!あ、頭が痛い!!!!!!』

「くう〜!!!念のためにヘッドホン持って来たけど響く〜」
『くああ!』

ユニコーンはあまりの頭の痛さに膝をついた。

「おお、すげえ。行くぜ!!!」

一夏はビートをOFFにし鉄球を振り回し始めた。

『きゃあ!!!』

「そらそらそら!!!!!!」

一夏は連続で回転させて何度もユニコーンに鉄球をぶつけた。

「必殺!!!鉄球投げ!!!」

『きゃあ!!!』

一夏は鉄球の部分をそのまま野球投げでユニコーンにぶつけるとユニコーンは壁まで吹き飛んでしまった。

「はっは〜どうだ!!!」

『悪は絶対に許さない!!!ふあ!!!』

ユニコーンが自身の顔に手を近づけると角が伸びて顔がお面を取るようになれ、フェンシングの様に变化した。

「うお!!!馬面の下に、はう!!!」

一夏はその光景に驚き振り回すのを止めてしまったため鉄球が一夏の股間に思いつき直撃し変な声を上げた。

「う、馬面の下にもう一つ顔が!!!」

この戦いを影からスコープオンゾディアーツが観察しており目の前の光景に驚いていた。

『ほう。スイッチが進化したか』

『ああああ!!!!!!』

「うお!!!」

簪はまるでフェンシングを過去に習っていたかのような動きで一夏にサーベルをぶつけてきた。

「この野郎!!!喰らえ!!!」

『ぶん!!!!!!』

「ぐえー!!」

一夏は鉄球を投げるがユニコーンはそれをサーベルではじき返し一夏に直撃させた。

「痛たたたた」

「一夏!!! エレキを使いなさい!!!」

「エ、エレキをか?」

「なに? ビビってるの?」

「んな訳あるか!!! …… あ、あれ?」

「どうしたのよ!? 早く使いなさいよ!!!」

「ま、まあちよつと待て心の準備が」

「無い無い無い無い!!! エレキが無い!!!」

どっかで落としたのか!?」

エレキスイッチは千冬が所持していることには気づいていなかった。

「何をしてるのよ!? 早く使いなさいよ!!!」

「あゝもう!!!」

『ランチャー、リーダー・オン』

「ちよ、ちよつと一夏!!!」

「喰らえ!!!」

『はあ!!!』

簪は放たれたミサイルを全てサーベルで叩き切った。

「げ!!! もう一回!!!」

一夏がさらにミサイルを撃とうとした瞬間に簪はスイッチを切り元に戻ってしまった。

「うおつと!!! 危ね!!!」

「どういうつもりよ」

「別に。貴方達は何か悪い事をしたわけじゃないから止めはささないだけ。もし、また私の邪魔をしたら今度は許さない」
そう言い簪は闇夜に消えていった。

第12話 夜・間・戦・闘（後書き）

こんばんわ、ケンです!!

如何でしたか？30日まで塾がある僕っていったい何を

楽しくて講座を取ったのやら。ま、後悔先に立たずでしたっけ？

そんな感じで頑張っていきます!!感想もお待ちしております!!

最近は暇すぎて話を作りすぎまして1日2話投稿で

当分は行きたいと思えます。それではさようなら

第13話 能・力・進・化

ある一室ではスコープオンが例の男性にユニコーンの報告をしていた。

「ほ。スイッチが進化をしたと」

「はい。本来、ユニコーンの武器は手から放つ破壊光弾のみ。

しかし、彼女の思いとシンクロし新たに武器を生成しました」

「彼女は確か、特撮好きだったと聞いているが」

「ええ。恐らくその時の武器を作ったかと」

「ふふふ。やはり、この学園は素晴らしい素質を持つ生徒が多い。

これだから止められない」

男性がにやけると男性の両目が赤く輝いた。

「少し動いてもよろしいでしょうか？」

「良いだろう。スコープオン、君には期待しているよ」

「ありがとうございます」

一夏は今、ラビットハッチで正座をしながら太陽に睨まれていた。

この光景を例えるなら蛇に睨まれた蛙がまさにピッタリだった。

その光景を見ている部員達は苦笑いで眺めていた。

「で？いつ、エレキスイッチを落としたのよ」

「え、えっと、分からねえ」

「分からないじゃないのよ！！！！！！」

「！！！！！！！！！！」

突然、太陽の怒号がラビットハッチに響きわたりセシリア達は驚いてしまった。

いつもはそっけないがここまで怒りをあらわにしているのを見るのは一夏も初めてだった。

「何で落としたのなら落としたりって言わないのよ!!!!!!!!!!!!!!」

「わ、悪い」

「もつと早く言ってくればスイッチだって探すしユニコーンとの戦闘だって考えた!!!!!!!!!!それで、ほかの生徒が襲われたりでもしたら

どう責任をとるのよ!!!!!!!!!!貴方だって怪我をするかもしれないのよ!?分かってるの!?!」

太陽のマシガンのような説教に一夏はさらに縮こまっていった。

「……………」

「もういい。スイッチは自分で探して。

私はなにも手伝わない」

そのまま太陽はラビットハッチから出ていった。

翌日の朝、一夏はいつもよりも早く起きて部屋を出ていった。

既に太陽が起きていたが昨日の事もあり一言も話さずに

部屋を出た。一夏が部屋を出たのを見ると太陽は

大きいため息をついた。

「は。なんで昨日私あんなに言っちゃったんだろ」

太陽は昨日、言い過ぎた事を自覚しているみたいだが

それは一夏の事を想っての事でもあった。

「一夏……………ごめんね」

その頃、一夏は学校中を探し回っていた。

昨日通ったルートをなんとか思い出しどこかに落ちてないかを探して

いると目の前に千冬がいるのが見えた。

「こんな所で何をしているんだ？一夏」

どうやら職務外なのか名字ではなく名前と呼ばれたので

一夏も名前で呼ぶことにした。

「あ、ああちよつとね」

「なんだ？言ってみる。私も手伝うぞ」

「いや、良いよ自分で探すから」

一夏は少しいらつきながら千冬の

助けを断った。

「そうか……ま、頑張れよ」

千冬はそう言い職員室へと向かった。

「なんで俺はさつき千冬姉にいらついていたんだ？」

そして時間は流れ昼休み。

一夏は昼食も食わずにスイッチを探していた。

セシリア達からも手伝おうかと言われたが自分の責任だと言って

一人で探すことにした。すると、どこからか花瓶を割ったような音が聞こえてきた。

それも、一回ではなく何回も。不審に思った一夏はその方向へ行ってみると

そこには、ユニコーンと生徒をかばっている千冬の姿が見えた。

「千冬姉！！！」

一夏は走りだしてユニコーンに蹴りを入れた。

「きゃ！また、貴方」

「い、一夏！！！！なぜ、来たんだ！！逃げろ！！！！」

「そう言う訳にはいかない！！」

一夏はドライバーを取りだしスイッチを押ししていくとカウントがはじめられた。

『3・2・1』

「変身！……！」

「くっ……！」

千冬が突風で目を瞑り、再び開けるとそこにはいつもの弟の姿ではないものがいた。

「宇宙来た……！」

「な、なんなのよあれは!？」

「い、一夏、お前は」

「話は後だ!!先にその子を……!!」

「ああ、行くぞ」

千冬は生徒を連れて安全な所へと逃げていった。

『逃がさない……!』

「こっちの台詞だ……!!」

『ロケット・オン』

一夏はロケットスイッチを入れるとロケットパンチを喰らわし別の方向へと吹き飛ばした。

『きゃあ……!!』

「さあ、行くぜ……!!」

その戦闘の様子を屋上で眺めている者がいた。

さそり座のゾディアーツ、スコーパーピオンであった。

『ふん』

スコーパーピオンは飛び降りフォーゼに下降しながらの踵落としを決めた。

「ぐわ!お前は……!」

『フォーゼ、貴様は邪魔だ』

スコーパーピオンはクロークを脱ぎ棄てユニコーンと共に

一夏に攻撃を仕掛けていった。

一夏も応戦するがスコーパーピオンの蹴りを凌ぐとその隙を狙ってユニコーンのサーベルが、サーベルを防ぐと

蹴りが入り徐々にダメージが増えていった。

『ふん!!』

「ああ!!」

スコープピオンの蹴りをまともに喰らい吹き飛ばされてしまった。

「一夏!!」

「な、千冬姉!!なんでここに!!さつき逃げろって」

『はあ!!』

ユニコーンが二人に向けて手から大量の破壊光弾の放ち始めたのを見た一夏は千冬を突き飛ばした。

「い、一夏!!」

「うわああああ!!!!」

全ての破壊光弾を喰らった一夏は変身が解け、気を失い倒れ伏してしまった。

「い、一夏!!しつかりしろ!!!!」

『この程度か。お前は続ける』

『はい』

ユニコーンはどこに飛び去りスコープピオンは瞬間移動をしてどこかに消え去った。

千冬は倒れた一夏をすぐに医務室に運びこみ治療を受けさせた。

「先生!!一夏は!?!」

「落ち着いて下さい!!命に別条はありませんから」

「す、すみません。中に入っても?」

「ええ、どうぞ」

千冬が中に入ると一夏はベッドで横になり眠っていた。

千冬はポケットからエレキを取り出した。

先程の戦闘を見たとき自分の持っているスイッチが似ていると思いドライバーにある物と比べると色は違えど同じだった。

「ん、ん」

「目が覚めたか、一夏」

「ああ、なんとか……なんで千冬姉がそれを持つてるんだ」

一夏は千冬の手を持たれているエレキを見て驚いていた。

「この前にお前とぶつかったときがあるだろう。」

その時に落ちていた」

「あ、あの時か。だから学校中探してもなかったんだ」

「お前の探している物はこれなのか？」

「ああ、ありがと」

一夏はエレキを受け取ろうとすると千冬が手を引いたために取れなかった。

「千冬姉？」

「一夏。さっきのはなんなんだ」

「……」

「何で言ってくれないんだ!!!一夏!!!!」

「千冬姉には言えない」

千冬は一夏の肩に手を置き問いただした。弟が怪物と

戦っているのを知れば誰だって問いただす。それが兄弟というもの。

しかし、一夏は一向に口を割ろうとはしなかった。それでも

千冬は何度も一夏に問いただした。

「一夏!!!!!!」

「うるさい!!!!!!」

「!!!!!!」

千冬は一夏の怒号を聞いて黙ってしまった。

「俺は千冬姉に全部教えないといけないのか!?俺の事を全部!!」

そりゃ姉弟だから話さなきゃいけないこともあるさ!!!!!!

でも、俺の秘密も話さないといけないのかよ!!!!!!」

「当たり前だろうが!!!!!!私はお前の姉であり保護者だ!!!!!!」

お前が何をしてるのかを知らないといけない!!!!!!」

「じゃあ、なんで千冬姉は俺がここに入学するまでここで

働いてた事を教えてくれなかったんだ!!!!!!???」

「そ、それは」

「千冬姉だつて俺に何も話してくれないじゃないか!!!」

ISの事も俺の親の事もそうじゃないか!!!!!!母親ぶるなよ!!!」

「!!!!!!!」

千冬はその言葉を聞いたとたんに顔色をかえ一夏の頬をはたいた。

「それが貴様をここまで育ててくれた人に言う言葉か!?

もう良い!!!!!!貴様の事など知らん!!!!!!好きにしろ!!!!!!」

金輪際私の事を姉と呼ぶな!!!!!!!」

千冬は一夏にエレキスイッチを投げて医務室から出ていった。

そして入りちがいにセシリアが医務室に入ってきた。

「な、何かありましたの?一夏さん」

「いや、何も無い。それでどうしたんだ?」

「あ、そうですわ!!!!!!これを見て下さい!!!!!!」

セシリアが一夏に手紙を渡し一夏は読んでいくと

そこにはこう書かれていた。

『如月太陽は預かった。返して欲しければ同封してある

地図の廃工場に来て。時間内に来なかつたら如月太陽は死ぬ』

「くそ!!!!!!こいつは何を正義と見て何を悪と

みてんだ!!!!!!この手紙はいつ届いたんだ?」

「分かりませんわ。太陽さんの机にこれがあつたのを放課後に見つ

けましたの」

「時間は……後10分しかない!!!!!!セシリア!!!!!!」

お前はこの事を全員に伝えてくれ!!!!!!俺は先に行く!!!!!!」

「分かりましたわ!!!!!!」

一夏は服を着替えすぐさま置いてあるバイクに乗り教師の

制止も聞かずに校門をバイクで飛び越えていった。

「織斑先生!!!!!!織斑君が!!!!!!」

「あんな奴の事など放っておけ!!!!!!」

「で、ですが……！」

「放っておけと叫びたら放っておけ……！」

「は、はい」

千冬は教師を気迫で黙らせ職員室へと帰っていった。

第13話 能・力・進・化（後書き）

こんにちわ！！カップ麺食って胸やけを起こしたケンでございます
！！！！

久々にカップ麺食おうかなとお母さんの用意してくれたおにぎりと
一緒に

食べたらまさかの相性最悪だったのかはたまたまたカップ麺がいけな
かったのか

めちやくちや吐きそうっす。うっぷ！

如何でしたか？感想もお待ちしております。

それでは！！

第14話 電・気・変・身

太陽は気が付くと廃工場で縄で縛られた状態で放置されていた。周りを見渡すと最近に廃されたのか機器等はすでに回収されていたがまだ、床などはキレイな状態だった。

「目を覚ました？如月さん」

目の前に簪が歩いてきた。手にはスイッチが握られていた。

「なんでこんな事をしたのよ!？」

「ねえ、特撮番組見てる？」

「は？何を言ってるのよ」

「そのテレビではね悪は必ず正義に倒されるの。それが私は好きなの」

「回答になつてないわ。動機はなんなのよ!？」

「今の学校は悪が満ちてる。テストでカンニングしたり校則破つたりしてる人がたくさんいる。私はそれが気に食わなかった!?!?!?!だから私はこの力で悪を根絶する!?!?!?!」

「ぶはははは!?!?!?!ばつかじゃないの？」

太陽は簪の余りにもおかしな動機に笑いをこらえる事が出来なかった。

「どういう意味？」

「あんたがやってるのはただの弱い者いじめじゃないのよ!?!?!?!あんたがしてる事こそ悪なのよ!?!?!?!」

「なんとでも言つて。もうすぐ貴方は死ぬから」

「どういう意味よ!?!？」

「ここに織斑君が私が指定した時間にこなかったら貴方を殺すつて言ってるから。後、1分もないよ」

「い、一夏は必ず来る!?!?!?!だって私を護るつて言ってくれたもん!?!?!?!」

「それは本心で言ってるの？」

「え？」

簪の問いに太陽は黙りこくってしまった。

確かに一夏は護ると言っているがそれは一夏の本心か、それともフォーゼとして言っているのか、それは定かではない。

「彼は仮面ライダーとして言ってるんだよ」

「そ、そんな事ない!!!!!!一夏は……一夏は……」

「太陽!!!!!!」

「!!!!!!」

工場にバイクのエンジンの音と一夏の声が響いた。

その声を聞いたとき簪は驚きに顔を染め太陽には嬉しさが満ち溢れた。

「な、なんで？IS学園から間に合わないようここを選んだのに!!!!!!」

「人間の行動は時には可能性すら超えるんだよ!!!!!!それと、更識さん」

「な、何!?!」

「人は正義の為ならどこまでも残酷になれるんだ。今、君がしてるのは正義なんかじゃない!!!!!!」

「う、うるさい!!!!!!」

「一夏!!!!!!ほら間に合ったんだから離しなさいよ!!!!!!」

「そんな訳ないでしょ!!!!!!貴方は最初から始末する気だったのよ」

『ラスト・ワン』

スイッチが簪の感情に呼応するように形を変えスイッチを押すと一角獣座が現れ簪の肉体は繭に包まれ排出され精神だけが

ゾディアーツとなった。それを見た一夏はすぐさま、ドライバーを取りだした。

『3・2・1』

「変身!!!!!!」

一夏はフォーゼとなった。

「君のその悪を憎む心や太陽が俺以外に友達を作らないとことか
それ以外の皆のねじ曲がってひん曲がった部分も俺は受け入れる！
！！！！」

『エレキ』

「使えるの？一夏」

「ああ、コツは掴んだ」

「」「頑張って！！！！！！」

「ああああああ！！！！！！！！」

「よつと、そら！！！！」

一夏は簷のサーベルを避け、蹴りをいれ遠くの方に蹴とばし
エレキスイッチをONにした。

『エレキ・オン』

エレキスイッチがONにされると右腕にロッドが現れ、前は肘よ
り下しか

金色に染まらなかったが今回は違い体全体に電流が流れ込み
全身が金色に染まりエレキステイツへとステイツチエンジした。

「おゝ！！金色になった！！！！」

鈴がエレキステイツを見て感嘆の声を上げた。

「このパワー痺れるぜ！！！！！！」

一夏はロッドにあるコンセントを3個あるプラグのうちの
左側に差し込むとロッドに電流が流れ込んだ。

「あああ！！！！」

「おら！！！！！！」

一夏はユニコーンのサーベルをロッドで弾き
ユニコーンを切ると電流が流れ火花が散った。

「エレキスイッチはステイツチエンジの力を持つスイッチだったの
ね」

太陽はなぜ、エレキスイッチが他のスイッチを圧倒する量のコスミ
ックエネジー

を保有しているのか分かり感心していた。

「ああ!!！」

「次はこいつだ!!!!！」

一夏はコンセントを差し替え、ロッドを振ると電気の斬撃が飛んだ。
「きゃ!!この!!！」

ユニコーンは斬撃を避けて空高く飛びあがり一夏にサーベルをつきたてようとしたが一夏は3つ目のコンセントに差し込みロッドを振ると電流がユニコーンの体に巻きつき拘束具のようになった。

「あああ!!!!！」

「よし、一夏!!!!リミットブレイクよ!!!!！」

エレキスイッチをロッドに!!!!!!！」

「分かった!!！」

一夏はドライバーからエレキスイッチを取りロッドの下にあるくぼみに差し込むと警報の様な音が響き渡り電子音声が流れた。

『リミットブレイク』

「ああああああ!!!!!!！」

「行くぜ!!!!ライダー100億ボルトブレイク!!!!!!！」

「きゃああああ!!!!!!！」

ユニコーンが最後の力を振り絞り一夏に特攻をしかけるが

一夏はすれ違いざまに斬りつけるとユニコーンは大爆発を起こしスイッチだけが残った。

「よつと」

一夏がスイッチをOFFにするとスイッチが消滅し簪が目を覚ました。

「っっやったー!!!!!!」

「これがエレキの力、やっぱり普通じゃなかった」

一夏はエレキスイッチを元に戻し変身を解除した。

第14話 電・気・変・身(後書き)

こんばんわ〜ケンでっせ〜

如何でしたか？宿題多すぎんだろといつも呟きながら

更新しております。オリゾディアーツは必ず入れますので
ご安心を。それでは、さようなら〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6513z/>

インフィニットストラトス 3・2・1、フォーゼ来たー！！

2011年12月30日00時52分発行